

1. はじめに
2. 明治前期の貿易 (1872 (明治5) ~1891 (明治24) 年)
3. 明治後期の貿易 (1892 (明治25) ~1911 (明治44) 年)
4. 大正時代の貿易 (1912 (大正元) ~1925 (大正14) 年)
5. 昭和初期から戦時中の貿易 (1926 (昭和元) ~1945 (昭和20) 年)
6. 戦後の貿易 (1946 (昭和21) ~1965 (昭和40) 年)
7. 昭和後期の貿易 (1966 (昭和41) ~1988 (昭和63) 年)
8. 平成令和の貿易 (1989 (平成元) ~2022 (令和4) 年)
9. おわりに

※近畿圏は神戸税関と大阪税関が管轄するうち、大阪、兵庫、京都、滋賀、奈良、和歌山の2府4県を集計しています。

<神戸税関>

神戸税関本関（神戸港）、尼崎、姫路、相生、東播磨

<大阪税関>

大阪税関本関（大阪港）、堺、岸和田、関西空港（1994年の開港以前は伊丹空港）、舞鶴、宮津、京都、滋賀、下津、和歌山、田辺、新宮

※開港年については京都及び滋賀については内陸地であり港がないため、税関設置の年とします。

※本資料作成にあたり、過去の品目の集計方法が各文献で異なっているため、品目の紹介方法が異なっているところがあります。

○表示単位未満は四捨五入をしています。

○詳細なデータについては「データ集」をご確認ください。

※本資料を他に転載するときは、大阪税関の資料に基づく旨を注記してください。

※本資料に関するお問い合わせは大阪税関調査部調査統計課までお願いします。

（電話 06-6966-5385）



（作成協力：神戸税関調査部調査統計課）

<参考文献>

- ・税関百年史
- ・大阪税関百二十五年史
- ・神戸税関百年史
- ・神戸港150年の記録
- ・阪神・淡路大震災から20年「神戸港の貿易」
- ・東京大学経済学部日本産業経済研究資料5「明治初年の貿易統計」

1.はじめに

1872（明治5）年11月28日、全国の運上所は「税関」に呼称統一されました。今年は税関発足150周年です。150年の間に近畿圏の貿易はどのような変遷を辿ってきたのでしょうか。古文書から掘り起こした貿易統計の数字を元に貿易の歴史を振り返ってみたいと思います。

近畿圏150年における開港推移



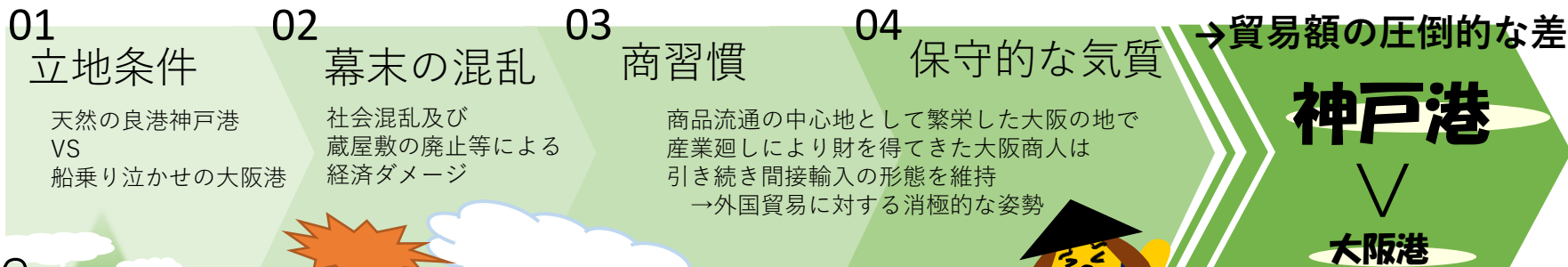
税関	港	開港（開設）年	明治	大正	昭和	平成	令和
神戸	神戸	1867（慶応3）					
	尼崎	1954（昭和29）	1954				
	姫路	1959（昭和34）	1959				
	相生	1965（昭和40）	1965				
	東播磨	1971（昭和46）	1971				
大阪	大阪	1868（明治元）					
	堺	1962（昭和37）	1962				
	岸和田	1967（昭和42）	1967				
	伊丹空港	1959（昭和34）	1959				
	関西空港	1994（平成6）	1994				
	宮津	1899（明治32）	1899				
	京都	1922（大正11）	1922				
	滋賀	1994（平成6）	1994				
	舞鶴	1948（昭和23）	1948				
	下津	1948（昭和23）	1948				
	和歌山	1948（昭和23）	1948				
	田辺	1948（昭和23）	1948				
	新宮	1989（平成元）	1989				

150年前の神戸港と大阪港

税関発足時である1872（明治5）年に近畿圏で開港していた港は、神戸港と大阪港の二港のみでした。

当時は神戸港の方が貿易額は大きく、大阪港の貿易額は神戸港と比較すると遥かに少ないものでした。

その背景として、神戸港は海深く、秋冬の北風も摩耶、六甲の連山に遮られるといった天然の良港であったことが挙げられます。一方の大阪港は、河口は絶えず土砂が堆積し、大型化した船舶が出入りするには幅員や水深などが余りにも小さく、冬には強い西風が吹きつけ積み卸しの荷役は不能、乗組員は上陸できずと港としては最悪の条件が重なっていました。



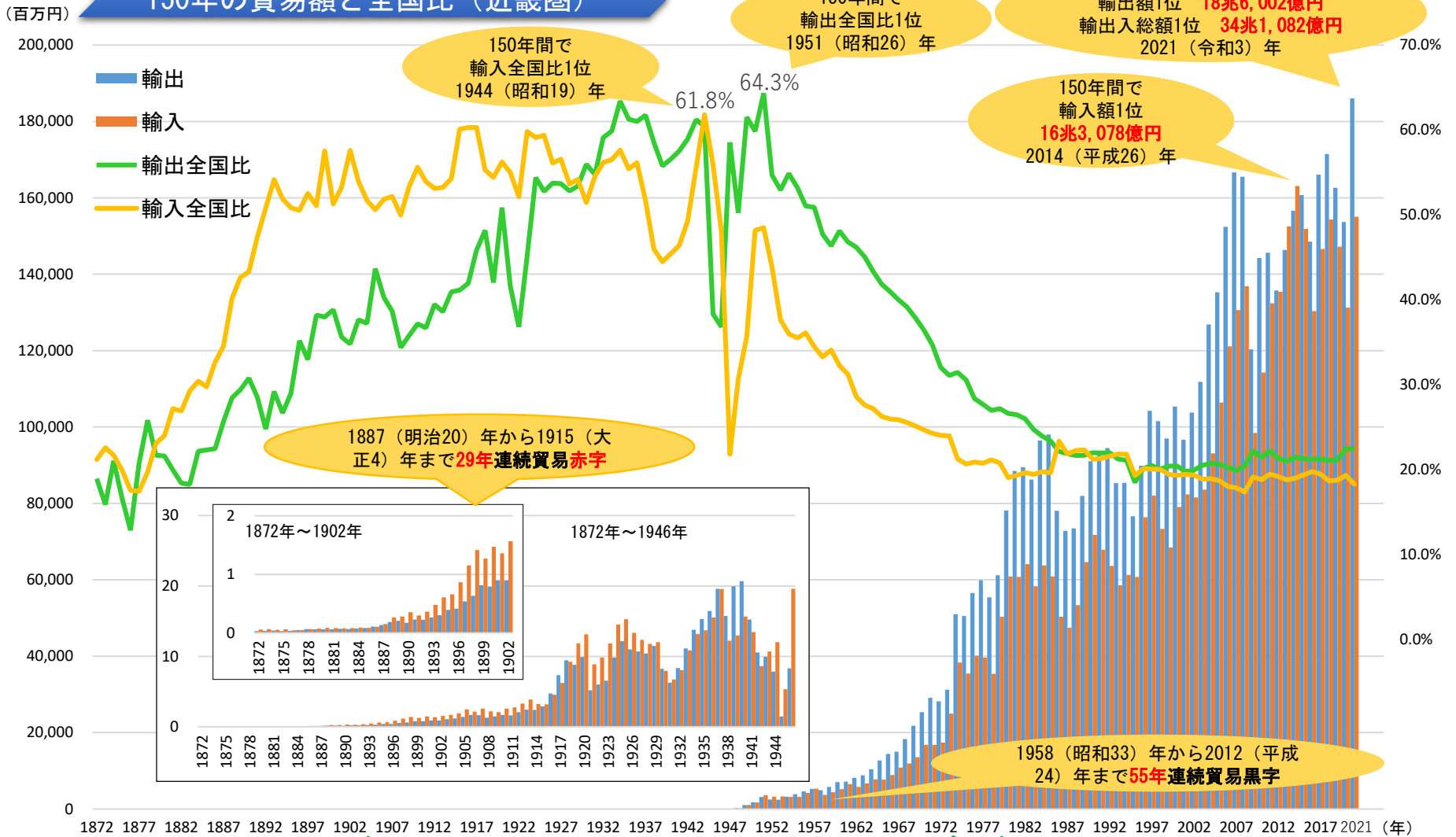
それに加え、大阪は江戸時代から「天下の台所」と呼ばれる全国的な商品流通の中心地、全国各地から様々な産物が集まる商業都市であり、大阪商人は「産業廻し」といわれる仲買人として資本の蓄積を行っていたものの、幕末の社会混乱や蔵屋敷の廃止により全国からの商品が集まらなくなったこともあり、大阪経済は大きなダメージを受け、元々保守的であった大阪商人はさらに外国貿易へ消極的となり、貿易は不振を極めたのです。

農業国から工業国へ ~5つの転換点~

- ① 明治政府の施策
 - ・殖産興業政策
 - ・貿易促進政策
- ② 各種工業の勃興
 - ・紡績業・マッチ工業
 - ・鋳工業・造船業
 - ・鉄道業・薬品製造業 etc.
- ③ 戦争による特需
 - ・日清戦争
 - ・日露戦争
 - ・第一次世界大戦
 - ・第二次世界大戦
- ④ 大阪築港計画
 - ・川口の波止場
 - ・大型船舶の受入可
 - ・集積基地化
 - ・臨海工業地帯化
- ⑤ 中国市場の開拓
 - ・地理的要件
 - ・昔からの中国商人の在留
 - ・戦禍をきっかけとした需要の高まり

しかし、時代とともに、また上記の転換点を経て、大阪港の貿易額は次第に増加し、近畿圏の貿易額全体も右肩上がりに増加していきます。次のページでは150年間の貿易額と全国比の推移をご覧ください。

150年の貿易額と全国比（近畿圏）

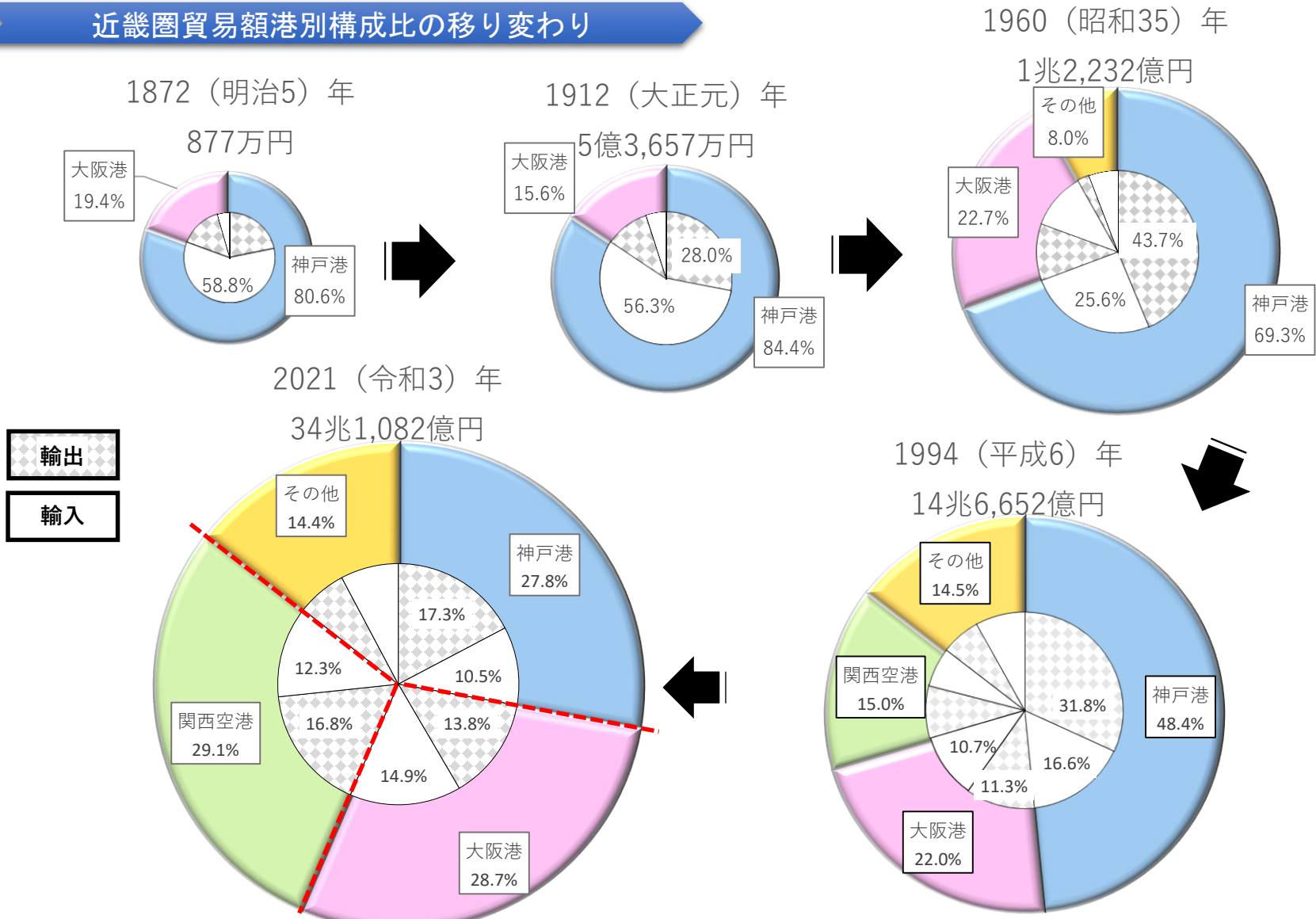


1872 1877 1882 1887 1892 1897 1902 1907 1912 1917 1922 1927 1932 1937 1942 1947 1952 1957 1962 1967 1972 1977 1982 1987 1992 1997 2002 2007 2012 2017 2021（年）

- 明治5年：全国の運上所「税関」に呼称統一
- 日清戦争（明治32年）
- 関税法施行（明治32年）
- 日露戦争（明治36年）
- 大阪築港一般開放（明治36年）
- 世界第一次
- 日中戦争
- 太平洋戦争
- 世界第二次
- 戦後復興期
- 第一石油危機（昭和48年）
- 第二次石油危機（昭和53年）
- ブラザ合意（昭和60年）
- バブル崩壊（平成3年）
- 阪神大震災（平成7年）
- リーマンショック（平成20年）
- 新型コロナウイルス感染症拡大（令和2年）

高度経済成長期突入

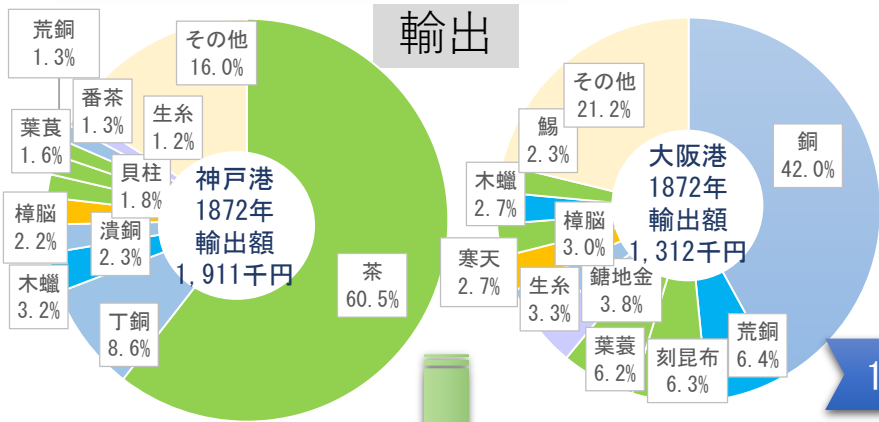
近畿圏貿易額港別構成比の移り変わり



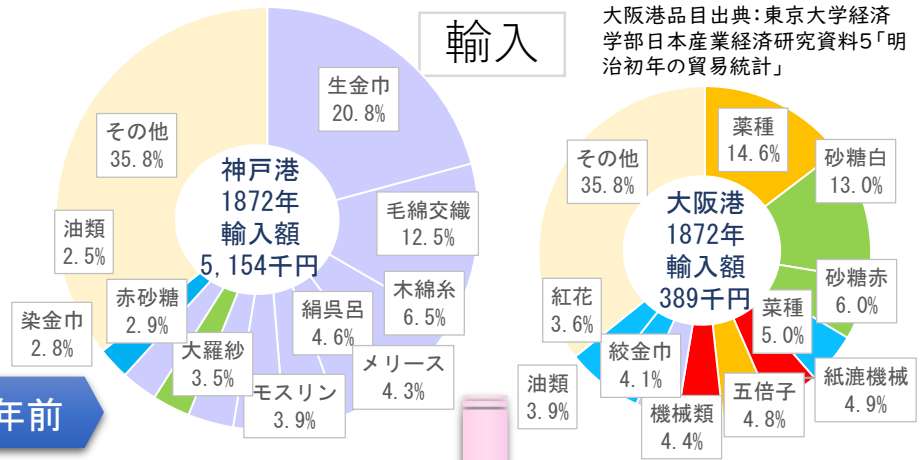
たった二港でスタートした近畿圏ですが、他の港や関西空港の開港に伴い貿易額は分散され、現在近畿圏の貿易額は神戸港・大阪港・関西空港がほぼ同じ額になっており、輸出額は神戸港、輸入額は大阪港がやや大きくなっています。150年前、大阪港は現在よりもさらに川を上った川口の地に港を構えていた河川港でしたが、築港計画による大規模な改修を経て大型船舶の受入れが十分となり、集積基地化したことで埋め立てがさらに進み大港湾へと発展しました。

それでは、150年前、神戸港と大阪港でどのような品目が輸出入されていたのか、現在と比較して具体的に見てみましょう。

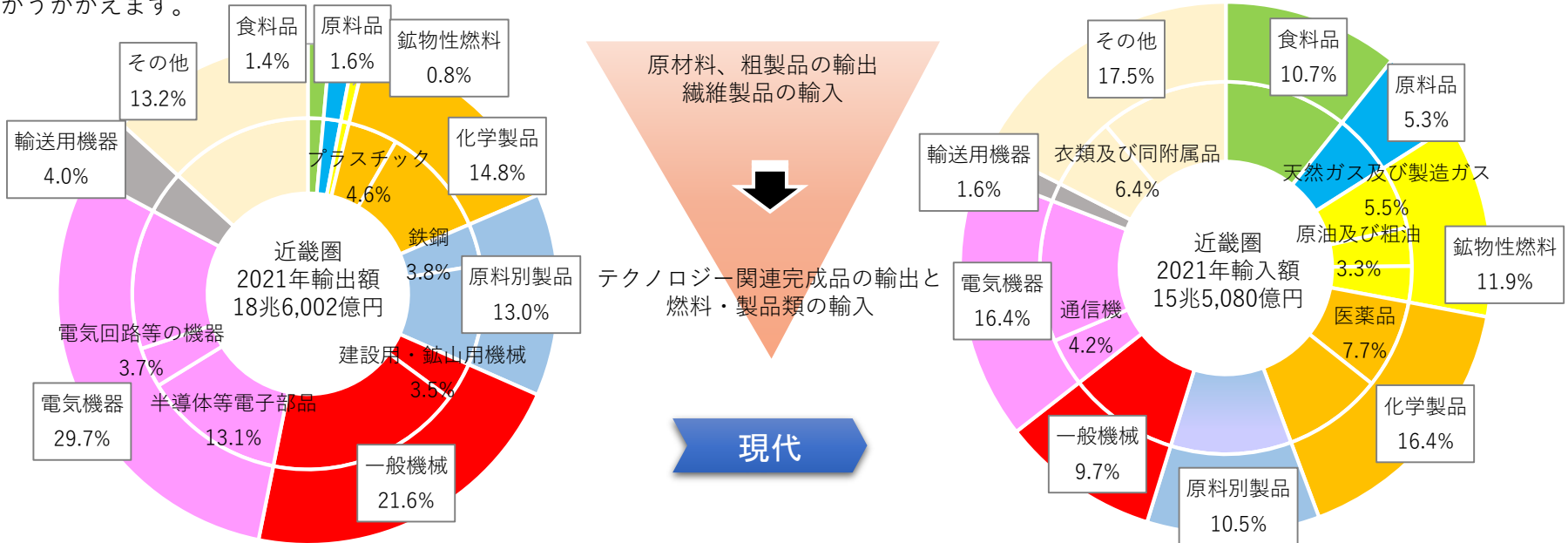
主要品目の移り変わり



150年前



1872（明治5）年、神戸港の輸出の60%程度を「茶」が、輸入の60%程度を「繊維製品」が占めています。神戸港は当時の全国的貿易動向にならって原材料、粗製品を輸出し、繊維製品などの工業完成品を輸入する典型的な発展途上国型の貿易構造であったのに対し、大阪港はその商業規模に比して特に輸入額が小さく、大阪の輸入品は神戸港や横浜港で輸入されたものを仕入れる間接輸入の商習慣が続いていたことがうかがえます。



2021(令和3)年の主要品目を見ると原材料や衣類、食品類を輸入し、電気機器類を中心とした工業完成品を輸出する貿易構造へ様変わりしました。代表輸出品目である半導体等電子部品は全国の中で近畿圏が約5割と構成比が大きくなっています。

主要貿易相手国の移り変わり

輸出

	1889 (明治22)年	1895 (明治28)年	1912 (大正元)年	1924 (大正13)年	1937 (昭和12)年	1981 (昭和56)年	2001 (平成13)年	2021 (令和3)年
1位	英吉利	香港	清国	中華民国	北米合衆国	アメリカ	アメリカ	中国
2位	北米合衆国	北米合衆国	北米合衆国	北米合衆国	英領印度	香港	中国	アメリカ
3位	香港	清国	關東州	英領印度	關東州	サウジアラビア	香港	台湾
4位	清国	英吉利	香港	香港	蘭領印度	韓国	台湾	韓国
5位	獨逸	朝鮮	英吉利	關東州	満洲國	台湾	韓国	香港
6位	佛蘭西	英領印度	英領印度	蘭領印度	中華民国	中国	シンガポール	タイ
7位	英領印度	獨逸	獨逸	英吉利	英吉利	シンガポール	ドイツ	ドイツ
8位	朝鮮	濠太刺利	佛蘭西	濠太刺利	海峡殖民地	ドイツ	マレーシア	ベトナム
9位	濠太刺利	英領亞米利加	濠太刺利	埃及	濠太刺利	インドネシア	タイ	シンガポール
10位	英領亞米利加	佛蘭西	布哇	比律賓諸島	比律賓諸島	オーストラリア	フィリピン	マレーシア

貿易相手国の移り変わりを見ると、1889（明治22）年、貿易相手国の1位は輸出入とも英吉利（英国）でした。大正時代になると輸出1位は清国、輸入1位は英領印度に変わり、昭和に入ると輸出入ともに北米合衆国（アメリカ）へ推移、半世紀以上貿易相手国1位はアメリカでしたが、平成に入り中国が1位に躍り出ました。

初代大阪税関が構えられた川口には多くの外国商人が居住しており、様々な文化の流入口でした。洋服、靴、パン、ビールなど今の日本人の生活の中で切り離すことができない数々の文化、生活様式が、明治の初期この川口居留地に伝えられ、全国に広がっていったと言われています。

さて、一体どのような転換過程を経て、近畿圏は現在の貿易形態へ変遷を遂げたのでしょうか。次のページからは時代を区切って見ていきましょう。

輸入

	1889 (明治22)年	1895 (明治28)年	1912 (大正元)年	1924 (大正13)年	1937 (昭和12)年	1981 (昭和56)年	2001 (平成13)年	2021 (令和3)年
1位	英吉利	英吉利	英領印度	北米合衆国	北米合衆国	アメリカ	中国	中国
2位	英領印度	清国	北米合衆国	英領印度	英領印度	サウジアラビア	アメリカ	アメリカ
3位	清国	英領印度	英吉利	英吉利	獨逸	インドネシア	インドネシア	台湾
4位	北米合衆国	獨逸	獨逸	中華民国	満洲國	オーストラリア	台湾	オーストラリア
5位	獨逸	北米合衆国	清国	獨逸	中華民国	中国	韓国	韓国
6位	香港	香港	關東州	濠太刺利	加奈陀	韓国	オーストラリア	ベトナム
7位	佛蘭西	佛領印度	蘭領印度	蘭領印度	蘭領印度	台湾	マレーシア	タイ
8位	朝鮮	佛蘭西	濠太刺利	關東州	伯刺西爾	カナダ	ドイツ	ドイツ
9位	土耳其	朝鮮	佛領印度	佛蘭西	英吉利	ドイツ	タイ	マレーシア
10位	白耳義	白耳義	海峡殖民地	海峡殖民地	埃及	英国	カナダ	イタリア

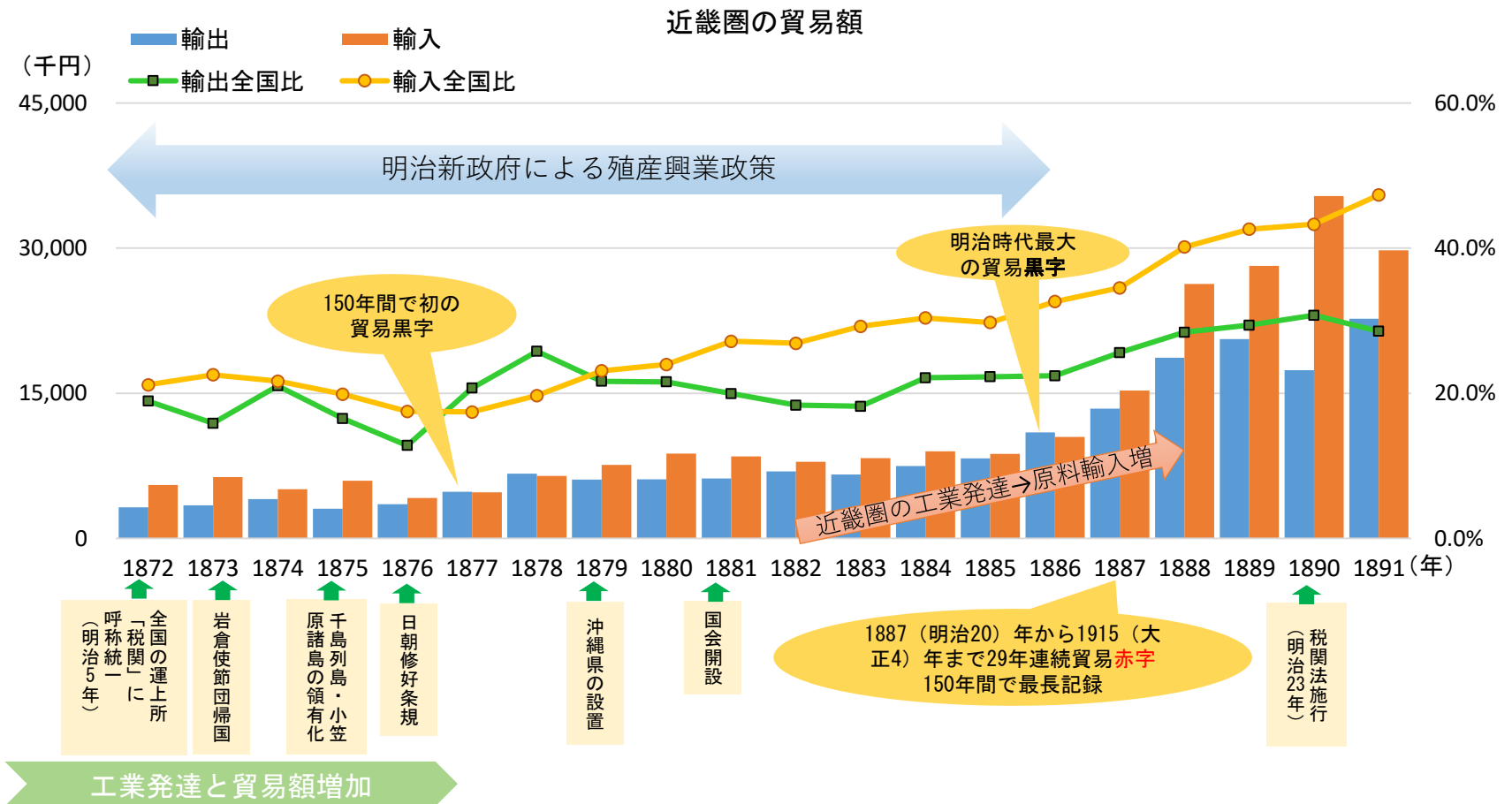
※1889年～1937年は神戸港+大阪港、1981年以降は近畿圏の上位

英吉利・・・Great Britain（英国）
 佛蘭西・・・France（フランス）
 濠太刺利・・・Australia（オーストラリア）
 獨逸・・・Germany（ドイツ）
 土耳其・・・Turkey（トルコ）
 白耳義・・・Belgium（ベルギー）
 埃及・・・Egypt（エジプト）
 布哇・・・Hawaii（ハワイ）
 比律賓・・・Philippines（フィリピン）
 加奈陀・・・Canada（カナダ）
 伯刺西爾・・・Brazil（ブラジル）

目次へ戻る

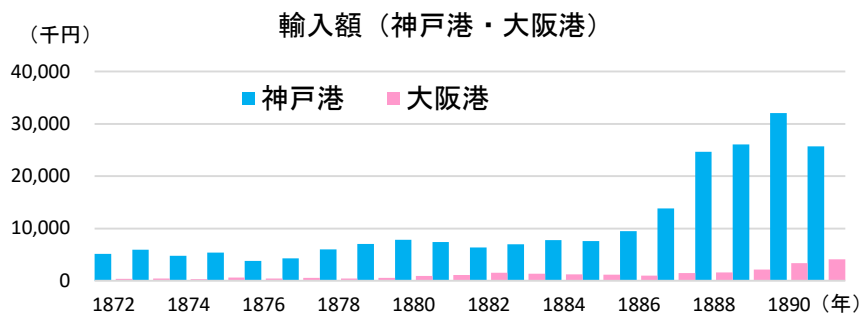
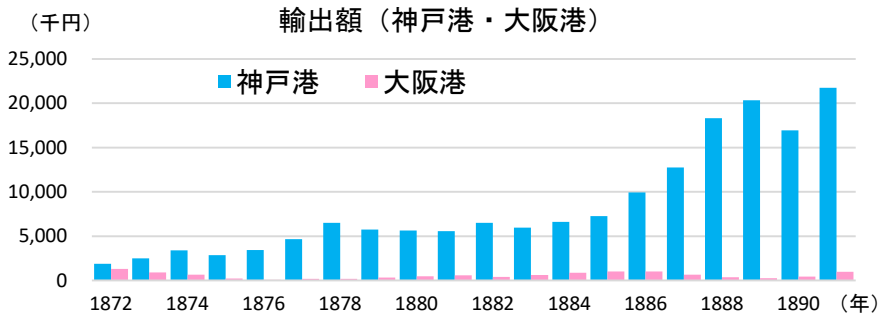
NEXT

2.明治前期の貿易 (1872 (明治5) ~1891 (明治24) 年)



明治前期の近畿圏の貿易は、国内経済の中心地として発達した関西地方を背景に新政府の強力な殖産興業政策と貿易促進政策を反映して順調な発展を辿りました。当初は横浜経由の間接輸入が多かったのですが、それを排除して順調な増勢を続けました。神戸港の貿易額増加により全国比が上昇しており、1891 (明治24) 年の近畿圏の輸入割合は50%に迫る程度になっています。

輸入超過となった理由としては、明治期を通じての我が国輸出品の主力であった生糸及び絹織物が横浜港に集結されたこと、東日本に比して西日本、特に近畿地方では工業が早く発達したので、これが海外からの原料の輸入を多く必要としたことなどの理由が考えられます。1872 (明治5) 年の輸出額は322万円、輸入額は554万円、1891 (明治24) 年の輸出額は2,272万円、輸入額は2,979万円でした。全国比は特に1880 (明治13) 年以降上昇を続け、1872 (明治5) 年は輸出が18.9%、輸入が21.2%でしたが、1891 (明治24) 年には輸出が28.6%、輸入が47.3%となっています。



1872（明治5）年輸出

	神戸港	大阪港
1位	茶 1,157 千円	銅 551 千円
2位	丁銅 165 千円	荒銅 84 千円
3位	木蠟 61 千円	刻昆布 83 千円
4位	漬銅 44 千円	葉蓑 82 千円
5位	樟脳 42 千円	鍍地金 49 千円
総額	1,911 千円	1,312 千円

1877（明治10）年輸出

	神戸港	大阪港
1位	茶 1,569 千円	寒天 37 千円
2位	米 1,149 千円	椎茸 26 千円
3位	生銅・熟銅 405 千円	生銅・熟銅 24 千円
4位	樟脳 191 千円	錫 15 千円
5位	寒天 176 千円	木蠟 13 千円
総額	4,657 千円	181 千円

1889（明治22）年輸出

	神戸港	大阪港
1位	米 5,917 千円	燐寸 41 千円
2位	緑茶 2,415 千円	錫 35 千円
3位	生銅・熟銅 1,610 千円	生銅・熟銅 33 千円
4位	樟脳 1,170 千円	木蠟 24 千円
5位	燐寸 1,061 千円	寒天 20 千円
総額	20,332 千円	261 千円

1872（明治5）年輸入

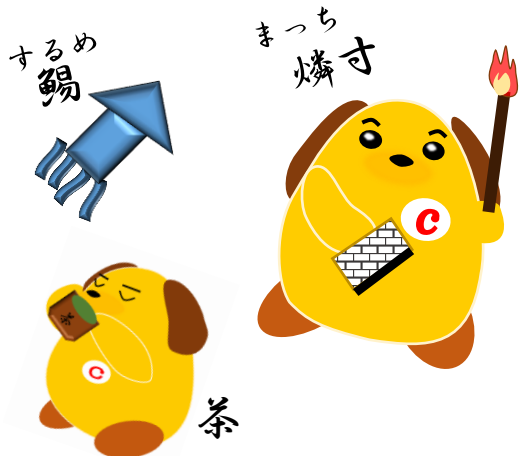
	神戸港	大阪港
1位	生金巾 1,072 千円	菜種 57 千円
2位	毛綿交織 646 千円	砂糖白 51 千円
3位	木綿糸 333 千円	砂糖赤 23 千円
4位	絹呉呂 235 千円	菜種 19 千円
5位	メリース 224 千円	紙漉機械 19 千円
総額	5,154 千円	389 千円

1877（明治10）年輸入

	神戸港	大阪港
1位	縮緬呉呂 696 千円	砂糖 188 千円
2位	生金巾 370 千円	鉛塊 47 千円
3位	石炭油 216 千円	菜種 30 千円
4位	砂糖 203 千円	唐紙 30 千円
5位	綿天鷲絨 176 千円	熟皮 28 千円
総額	4,258 千円	522 千円

1889（明治22）年輸入

	神戸港	大阪港
1位	綿織糸 6,357 千円	生綿(種子混入) 788 千円
2位	石油 1,991 千円	砂糖 494 千円
3位	線綿 1,883 千円	線綿 97 千円
4位	生綿(種子混入) 1,367 千円	熟皮(靴底皮含) 95 千円
5位	砂糖 1,343 千円	汽船 65 千円
総額	26,035 千円	2,131 千円



燐寸（マッチ）・紡績業の勃興

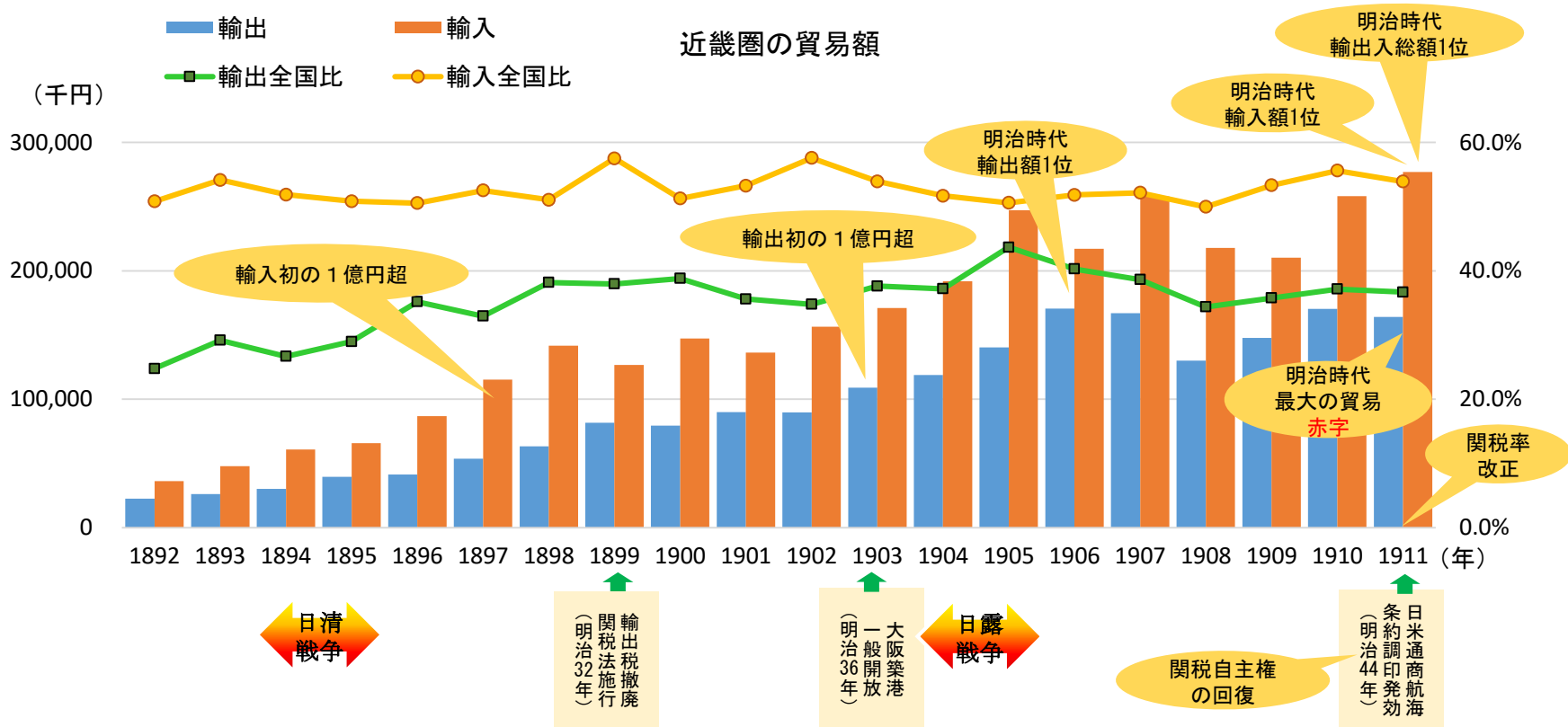
明治初期には茶、米、寒天、錫（するめ）といった食料品のほか銅が多く輸出されました。また、1887（明治20）年になると輸出品目に燐寸（マッチ）が登場します。当時、神戸も大阪も燐寸工業の興隆があり、燐寸の輸出は大正時代の後期まで上位品目に上がりました。

輸入については、1872（明治5）年は生金巾などの繊維製品が多く輸入されていたのに対し、明治20年代を迎えると製品ではなく綿織糸をはじめとした半製品、線綿といった原料の輸入増加が目立ってきました。これは国内の殖産工業化が進み、国内で繊維製品を生産する紡績業の勃興を著しています。

1889（明治22）年

	輸出		輸入	
	神戸港	大阪港	神戸港	大阪港
1位	英吉利 4,887 千円	香港 191 千円	英吉利 9,559 千円	清国 1,547 千円
2位	北米合衆国 4,140 千円	清国 57 千円	英領印度 5,127 千円	英領印度 192 千円
3位	香港 3,635 千円	佛蘭西 12 千円	清国 3,612 千円	英吉利 127 千円
4位	清国 1,868 千円	白耳義 1 千円	北米合衆国 2,244 千円	香港 107 千円
5位	獨逸 1,209 千円		獨逸 1,673 千円	獨逸 28 千円

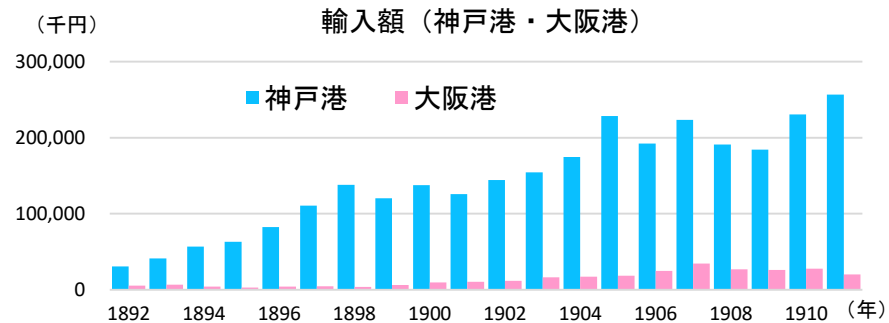
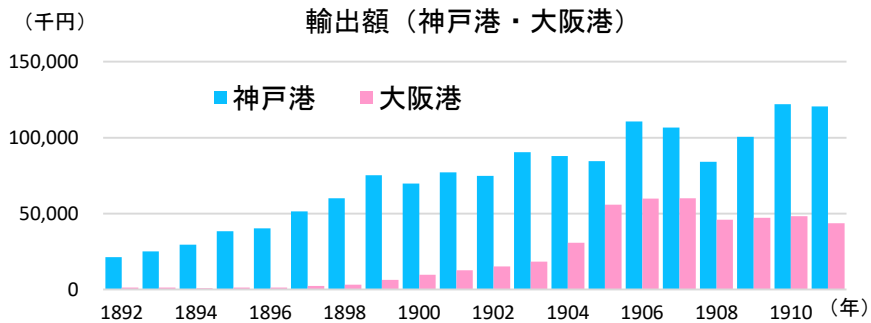
3.明治後期の貿易 (1892 (明治25) ~1911 (明治44) 年)



戦争による特需

この時代、我が国の貿易には戦争の影響が色濃く表れます。まずは日清戦争です。1894 (明治27) 年から翌1895 (明治28) 年にかけて日清戦争がありました。この戦勝は日本の経済発展に大きな刺激を与え、近代工業の発展をもたらすこととなり、貿易額は右肩上がりで増加しました。続いて1904 (明治37) 年には日露戦争が勃発し、食料や資源の輸入が増加しました。1911 (明治44) 年に我が国は条約改正により諸外国と初めて関税協定を結ぶことに成功し、名実ともに関税自主権を回復しました。

明治後期の近畿圏の貿易は、神戸港の貿易額が依然として多く、輸入超過となっています。日清戦争を経て綿工業をはじめとした国内諸工業がいよいよ軌道に乗り、1899 (明治32) 年には国定税率の制定とともに輸出税の全廃が実施されて輸出は全般的に進進しました。1911 (明治44) 年の輸出入総額は1872 (明治5) 年の約50倍にまで増加、輸出額及び輸入額ともにこの時代初めて1億円を超えました。



1893 (明治26) 年輸出

	神戸港	大阪港
1位	米 3,623 千円	生銅・熟銅 226 千円
2位	燐寸 3,235 千円	燐寸 183 千円
3位	緑茶 2,692 千円	錫 56 千円
4位	生銅・熟銅 2,227 千円	寒天 48 千円
5位	地蓆 1,720 千円	椎茸 47 千円
総額	24,969 千円	1,213 千円

1903 (明治36) 年輸出

	神戸港	大阪港
1位	綿織糸 24,391 千円	綿織糸 2,530 千円
2位	燐寸 7,677 千円	生金巾 1,971 千円
3位	荒銅・熟銅 7,436 千円	荒銅・熟銅 842 千円
4位	花苳 4,553 千円	燐寸 711 千円
5位	米 4,215 千円	洋傘 479 千円
総額	90,518 千円	18,395 千円

1910 (明治43) 年輸出

	神戸港	大阪港
1位	綿織糸 25,407 千円	綿織糸 13,460 千円
2位	銅(塊・錠) 13,612 千円	雲斎布 4,650 千円
3位	燐寸 7,994 千円	生金巾・シチグ 3,747 千円
4位	真田(麦稈製) 5,936 千円	白木綿 1,803 千円
5位	綿メヤス肌衣 5,645 千円	清酒 1,188 千円
総額	122,115 千円	48,202 千円

1893 (明治26) 年輸入

	神戸港	大阪港
1位	繰綿 10,114 千円	繰綿 2,119 千円
2位	砂糖 3,740 千円	米 1,018 千円
3位	綿織糸 3,567 千円	砂糖 714 千円
4位	豆類 2,450 千円	生綿(種子混入) 685 千円
5位	石油 2,150 千円	豆類 456 千円
総額	41,294 千円	6,505 千円

1903 (明治36) 年輸入

	神戸港	大阪港
1位	繰綿 56,949 千円	砂糖・精糖 5,748 千円
2位	米 23,676 千円	米 3,622 千円
3位	石油 4,335 千円	大豆 724 千円
4位	麦粉 3,884 千円	牛皮・水牛皮 617 千円
5位	砂糖・精糖 3,259 千円	柞蠶絲 422 千円
総額	154,534 千円	16,506 千円

1910 (明治43) 年輸入

	神戸港	大阪港
1位	繰綿 106,133 千円	繰綿 13,516 千円
2位	硫酸安母紐膜 4,983 千円	砂糖 2,656 千円
3位	羅紗・セルズ 4,861 千円	米 1,151 千円
4位	豆糟 4,565 千円	大豆 950 千円
5位	米 4,438 千円	麻類 631 千円
総額	230,568 千円	27,617 千円

大阪築港開放・紡績業の発展

明治後期になると、貿易に不向きな大阪港の設備改善に向けた築港計画が着々と実を結び、1903 (明治36) 年に大阪築港一般開放、外国貿易船が直接大阪に寄港することになり、貿易額が伸びました。

輸出では燐寸(マッチ)や茶、錫(するめ)、米のほかには地蓆(じむしろ)、花苳(はなむしろ)といった敷物など、製品類が上位に上がります。

輸入では神戸港、大阪港ともに繰綿が上位を占めていますが、当時近畿における紡績業の発達は著しく、大阪の新産業である紡績業の原料としても輸入されました。また、それまで香港やフィリピンから輸入されていた砂糖が英領インドから多く輸入されるようになり、インド綿や砂糖の輸入増加により英領インドはこの頃から一躍主要貿易相手国に躍り出ました。

米の輸入の増加は我が国の米価急騰が背景にあります。

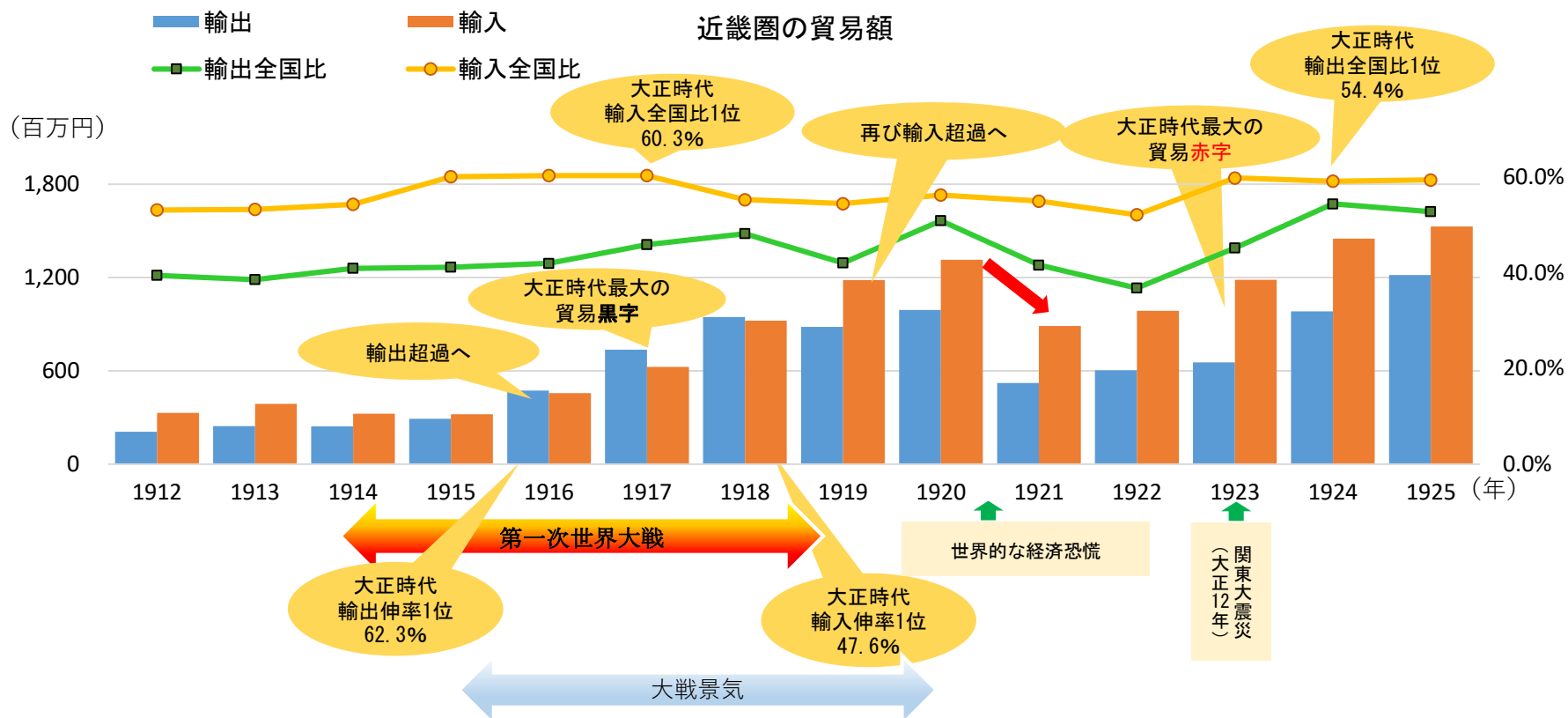
1895 (明治28) 年

	輸出		輸入	
	神戸港	大阪港	神戸港	大阪港
1位	香港 11,154 千円	朝鮮 896 千円	英吉利 17,268 千円	朝鮮 1,322 千円
2位	北米合衆国 9,685 千円	清国 139 千円	清国 15,012 千円	清国 604 千円
3位	清国 4,959 千円	香港 97 千円	英領印度 8,882 千円	英吉利 198 千円
4位	英吉利 3,430 千円	英領印度 0 千円	獨逸 5,292 千円	佛蘭西 116 千円
5位	英領印度 1,785 千円		北米合衆国 4,564 千円	英領印度 79 千円

1907 (明治40) 年

	輸出		輸入	
	神戸港	大阪港	神戸港	大阪港
1位	清国 28,722 千円	清国 28,095 千円	英吉利 51,128 千円	清国 9,605 千円
2位	北米合衆国 20,741 千円	韓国 19,674 千円	英領印度 48,956 千円	韓国 8,488 千円
3位	香港 14,758 千円	關東州 9,631 千円	北米合衆国 38,571 千円	英領印度 4,765 千円
4位	英吉利 8,543 千円	露領亞細亞 617 千円	清国 23,965 千円	蘭領印度 3,571 千円
5位	獨逸 6,839 千円	英領印度 585 千円	獨逸 22,423 千円	英吉利 2,930 千円

4.大正時代の貿易 (1912 (大正元) ~1925 (大正14) 年)



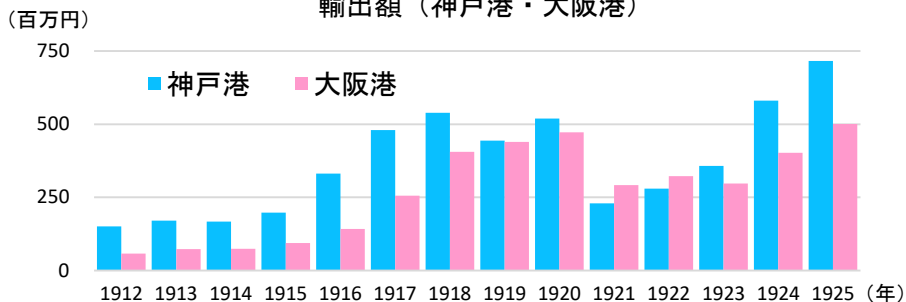
戦争特需と大戦景気

大正時代の近畿圏の貿易は、1914 (大正3) 年の第一次世界大戦の影響で、一時輸入超過から輸出超過へと転じます。大戦によりヨーロッパ諸国は自国の軍需生産に忙しく、日本とアジア市場を争うことができなくなり、その結果、我が国はアジア市場で覇権を制しました。交戦諸国への輸出を増加させ、さらには南アメリカ、アフリカの市場にまで進出することとなりました。大戦終結後に貿易は逆調となり、輸入超過となりました。1920 (大正9) 年には世界的な経済恐慌の中、近畿圏の貿易額は落ち込みました。

また、1923 (大正12) 年9月に関東大震災が発生したことで、横浜港が壊滅に帰し、横浜港に独占されていた生糸貿易が神戸港に移されたほか、関東方面の復興資材の輸入があり近畿圏の貿易額が伸びました。

近畿圏の貿易額をみると、1912 (大正元) 年の輸出額は2億779万円、輸入額は3億2,878万円、1925 (大正14) 年の輸出額は12億1,661万円、輸入額は15億2,736万円でした。

輸出額（神戸港・大阪港）



1912年（大正元）年輸出

	神戸港	大阪港
1位	綿織糸 32,514 千円	綿織糸 16,788 千円
2位	銅(塊・錠) 14,236 千円	生金巾・シチング 4,721 千円
3位	燐寸 9,198 千円	綾木綿 4,608 千円
4位	真田(麦糠製) 6,058 千円	燐寸 2,799 千円
5位	肌衣(綿リヤ製) 6,010 千円	白木綿 2,571 千円
総額	150,476 千円	57,313 千円

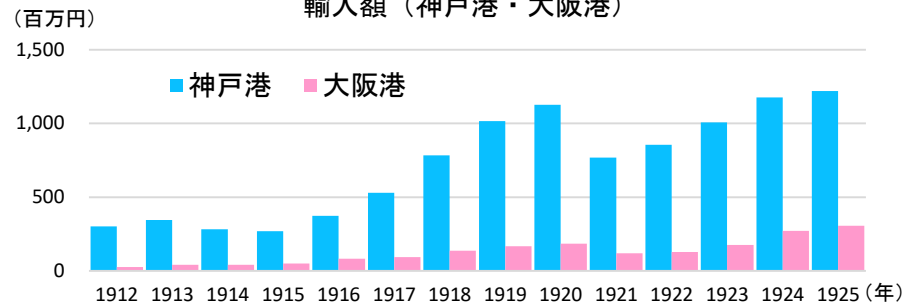
1918年（大正7）年輸出

	神戸港	大阪港
1位	綿織糸 72,272 千円	綿織糸 66,986 千円
2位	汽船 27,676 千円	生金巾・シチング 62,731 千円
3位	燐寸 23,278 千円	綾木綿 49,126 千円
4位	銅(塊・錠) 17,558 千円	天竺布 12,846 千円
5位	澱粉 13,632 千円	白木綿 9,858 千円
総額	539,350 千円	405,825 千円

1924（大正13）年輸出

	神戸港	大阪港
1位	生糸 88,466 千円	綿織糸 75,338 千円
2位	羽二重 52,826 千円	生金巾・シチング 71,782 千円
3位	ゴットン・富士絹 38,818 千円	綾木綿 38,847 千円
4位	生金巾・シチング 36,053 千円	綿繻子 24,200 千円
5位	綾木綿 21,508 千円	晒金巾・シチング 14,365 千円
総額	580,294 千円	402,379 千円

輸入額（神戸港・大阪港）



1912年（大正元）年輸入

	神戸港	大阪港
1位	繰綿 138,466 千円	繰綿 9,583 千円
2位	米 11,008 千円	砂糖 4,027 千円
3位	鉄板 7,684 千円	實綿 1,052 千円
4位	鉄(條・平・アングレ) 7,025 千円	燐鉱石 965 千円
5位	豆糟 6,457 千円	麻類 878 千円
総額	302,200 千円	26,583 千円

1918年（大正7）年輸入

	神戸港	大阪港
1位	繰綿 313,927 千円	繰綿 39,906 千円
2位	鉄板 44,973 千円	銑鉄 12,029 千円
3位	鉄(條・平・アングレ) 41,668 千円	砂糖 6,313 千円
4位	羊毛 33,440 千円	鉄(條・平・アングレ) 4,887 千円
5位	米 30,353 千円	木材 4,726 千円
総額	784,310 千円	137,538 千円

1924（大正13）年輸入

	神戸港	大阪港
1位	繰綿 422,452 千円	繰綿 78,183 千円
2位	鉄板 54,460 千円	木材 36,415 千円
3位	毛織糸 53,743 千円	砂糖 16,974 千円
4位	羊毛 52,338 千円	米 10,343 千円
5位	米 30,051 千円	羊毛 7,074 千円
総額	1,177,039 千円	272,754 千円

1924（大正13）年

	輸出		輸入	
	神戸港	大阪港	神戸港	大阪港
1位	北米合衆国 157,402 千円	中華民国 226,200 千円	北米合衆国 326,917 千円	英領印度 74,313 千円
2位	英領印度 58,396 千円	英領印度 61,131 千円	英領印度 229,223 千円	中華民国 55,959 千円
3位	中華民国 57,511 千円	關東州 43,761 千円	英吉利 185,653 千円	北米合衆国 50,099 千円
4位	英吉利 43,647 千円	蘭領印度 26,418 千円	獨逸 91,159 千円	蘭領印度 20,932 千円
5位	香港 37,375 千円	香港 20,672 千円	中華民国 75,633 千円	濠太刺利 15,999 千円

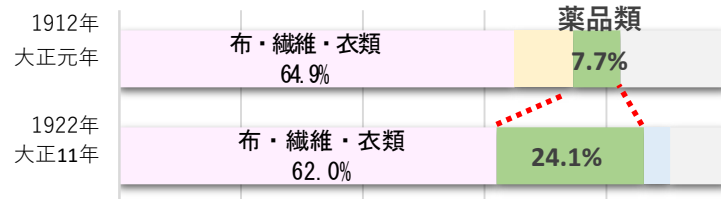
大正時代の大阪港の貿易は、大正初めころから中国財界の立ち直りに伴い対中国貿易を中心に活況を帯び始めました。国際的に大阪港の地位が認められるようになってきたのもこの時期です。大阪港においても大戦によるアジア市場への進出がありました。

大戦後の我が国の貿易収支が輸入超過である中においても、大阪港は輸出超過を維持しました。

大戦が長引くにつれて綿製品の需要が激増したので紡績業も発展し、さらにはヨーロッパ産綿製品の不足を我が国の生産力で補う形となり、近畿圏においても輸出が伸びました。

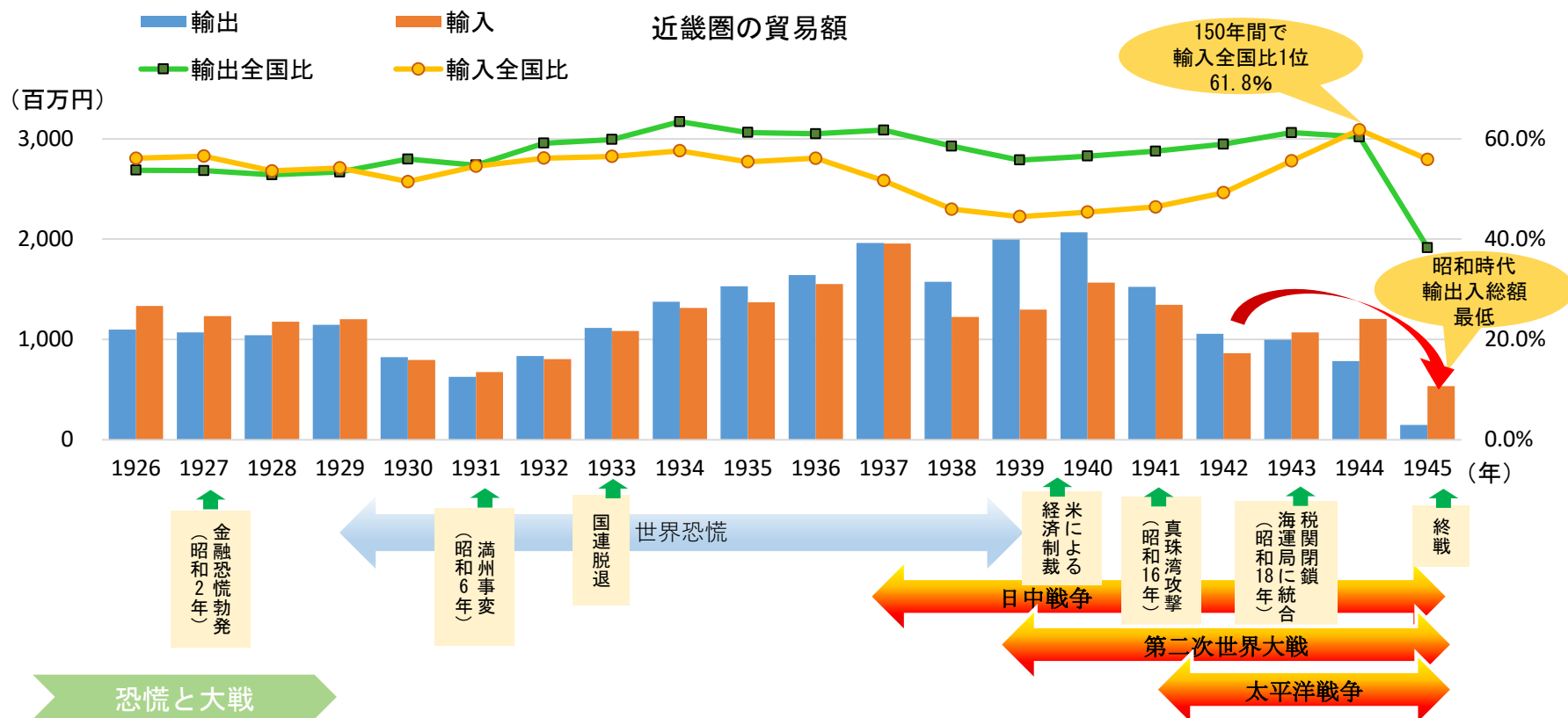
また、大阪港の輸出において**薬品類**の構成比が上がったこともこの時代の特徴です。背景には、このころ大阪府下随所に製薬工場が建設されたことがあります。

大阪港の輸出品目割合



薬品製造業の勃興・アジア市場への進出

5.昭和初期から戦時中の貿易 (1926 (昭和元) ~1945 (昭和20) 年)



昭和に入ってから第二次世界大戦の間における近畿圏の貿易は、全国と同様に激動の時期を迎えます。

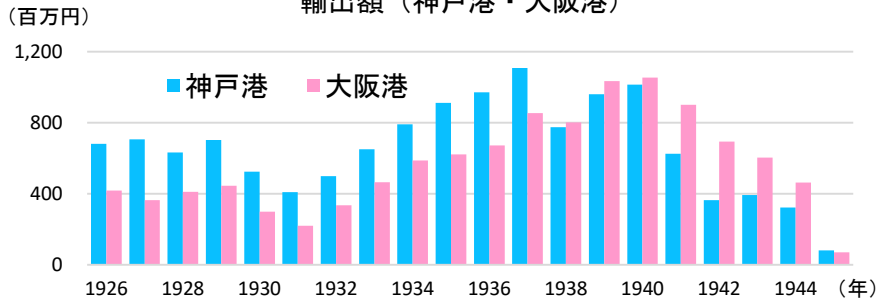
1927 (昭和2) 年の震災手形の処理を動因とした金融恐慌による我が国の貿易不振や1929 (昭和4) 年に金輸出解禁やいわゆる世界恐慌による物価下落や生産低下がありました。1931 (昭和6) 年に満州事変が勃発し、政府は金輸出再禁止とともに莫大な財政資金を産業界に撒布するインフレーション政策に転換することで、我が国産業は久しぶりに活況を呈することとなりました。

貿易額においても1932 (昭和7) 年以降、好調な伸長を続け、1937 (昭和12) 年に日中戦争に突入、貿易統制が行われ、1939 (昭和14) 年の第二次世界大戦の勃発を契機として、世界各国が国防力の強化に転向をし、アメリカをはじめとした諸国の経済封鎖が加わって、我が国の貿易圏は縮小されました。そして1941 (昭和16) 年の太平洋戦争が開始されると、事実上第三国との貿易は途絶し、貿易統制令が公布されて貿易に対する国家統制は強化されました。

また、戦局が厳しくなった1943 (昭和18) 年には税関が閉鎖され、海運局に統合されました。

1926 (昭和元) 年の輸出額は10億9,893万円、輸入額は13億3,410万円でしたが、1945 (昭和20) 年には輸出額1億4,875万円、輸入額5億3,468万円まで落ち込みました。全国比は1930 (昭和5) 年に輸出が輸入の割合を超え、大戦景気時1918 (大正7) 年以来の輸出超過となります。

輸出額（神戸港・大阪港）



1928（昭和3）年輸出

	神戸港	大阪港
1位	生糸 181,288 千円	綿織物 251,154 千円
2位	綿織物 76,598 千円	綿織糸 18,541 千円
3位	絹織物 68,872 千円	肌衣 9,904 千円
4位	肌衣 18,490 千円	絹織物 5,649 千円
5位	精糖 8,453 千円	珪瑯磁器 3,681 千円
総額	631,411 千円	409,894 千円

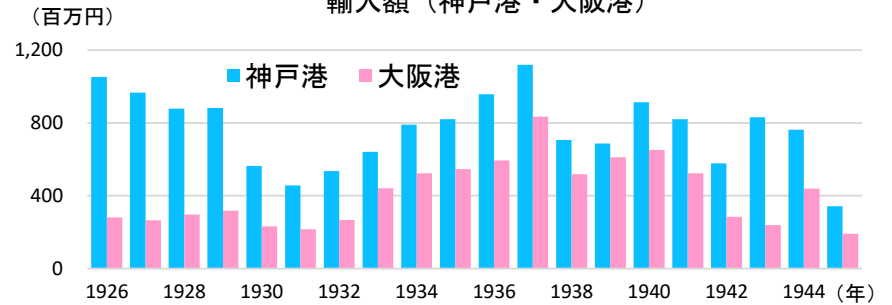
1932（昭和7）年輸出

	神戸港	大阪港
1位	生糸 121,114 千円	綿織物 171,772 千円
2位	綿織物 76,991 千円	綿織糸 14,609 千円
3位	絹織物 58,496 千円	人絹織物 11,589 千円
4位	肌衣 15,804 千円	肌衣 7,298 千円
5位	帆布製コム底靴 9,776 千円	人造絹糸 5,402 千円
総額	499,302 千円	334,212 千円

1936（昭和11）年輸出

	神戸港	大阪港
1位	綿織物 157,721 千円	綿織物 267,808 千円
2位	生糸 96,210 千円	人絹織物 32,582 千円
3位	人絹織物 73,573 千円	綿織糸 26,695 千円
4位	絹織物 35,685 千円	鉄板 16,170 千円
5位	毛織物 21,142 千円	毛織物 15,584 千円
総額	970,784 千円	672,233 千円

輸入額（神戸港・大阪港）



1928（昭和3）年輸入

	神戸港	大阪港
1位	繰綿 378,479 千円	繰綿 69,221 千円
2位	毛織糸 29,130 千円	木材 34,010 千円
3位	羊毛 28,494 千円	羊毛 20,273 千円
4位	生護謨 20,023 千円	自動車・部分品 9,749 千円
5位	硫酸アモニア 15,767 千円	鉄鐵 8,883 千円
総額	878,735 千円	297,418 千円

1932（昭和7）年輸入

	神戸港	大阪港
1位	繰綿 279,526 千円	繰綿 115,507 千円
2位	羊毛 22,975 千円	木材 15,124 千円
3位	製紙用パルプ 11,840 千円	羊毛 13,544 千円
4位	生護謨 9,826 千円	屑鉄 6,086 千円
5位	小麦 8,735 千円	鉛 5,757 千円
総額	535,647 千円	267,987 千円

1936（昭和11）年輸入

	神戸港	大阪港
1位	綿花 531,427 千円	綿花 231,421 千円
2位	生ゴム 41,353 千円	羊毛 31,746 千円
3位	パルプ 36,279 千円	木材 24,859 千円
4位	羊毛 28,278 千円	鉛 14,491 千円
5位	麻類 20,198 千円	銅 14,470 千円
総額	958,220 千円	593,264 千円

1937（昭和12）年

	輸出		輸入	
	神戸港	大阪港	神戸港	大阪港
1位	北米合衆国 211,381 千円	關東州 156,325 千円	北米合衆国 321,378 千円	北米合衆国 323,205 千円
2位	英領印度 119,398 千円	満洲國 127,537 千円	英領印度 271,104 千円	英領印度 103,867 千円
3位	關東州 75,477 千円	英領印度 113,967 千円	獨逸 66,450 千円	中華民国 38,103 千円
4位	英吉利 61,172 千円	蘭領印度 110,866 千円	満洲國 47,059 千円	満洲國 37,121 千円
5位	蘭領印度 60,482 千円	中華民国 83,374 千円	中華民国 43,135 千円	加奈陀 35,984 千円

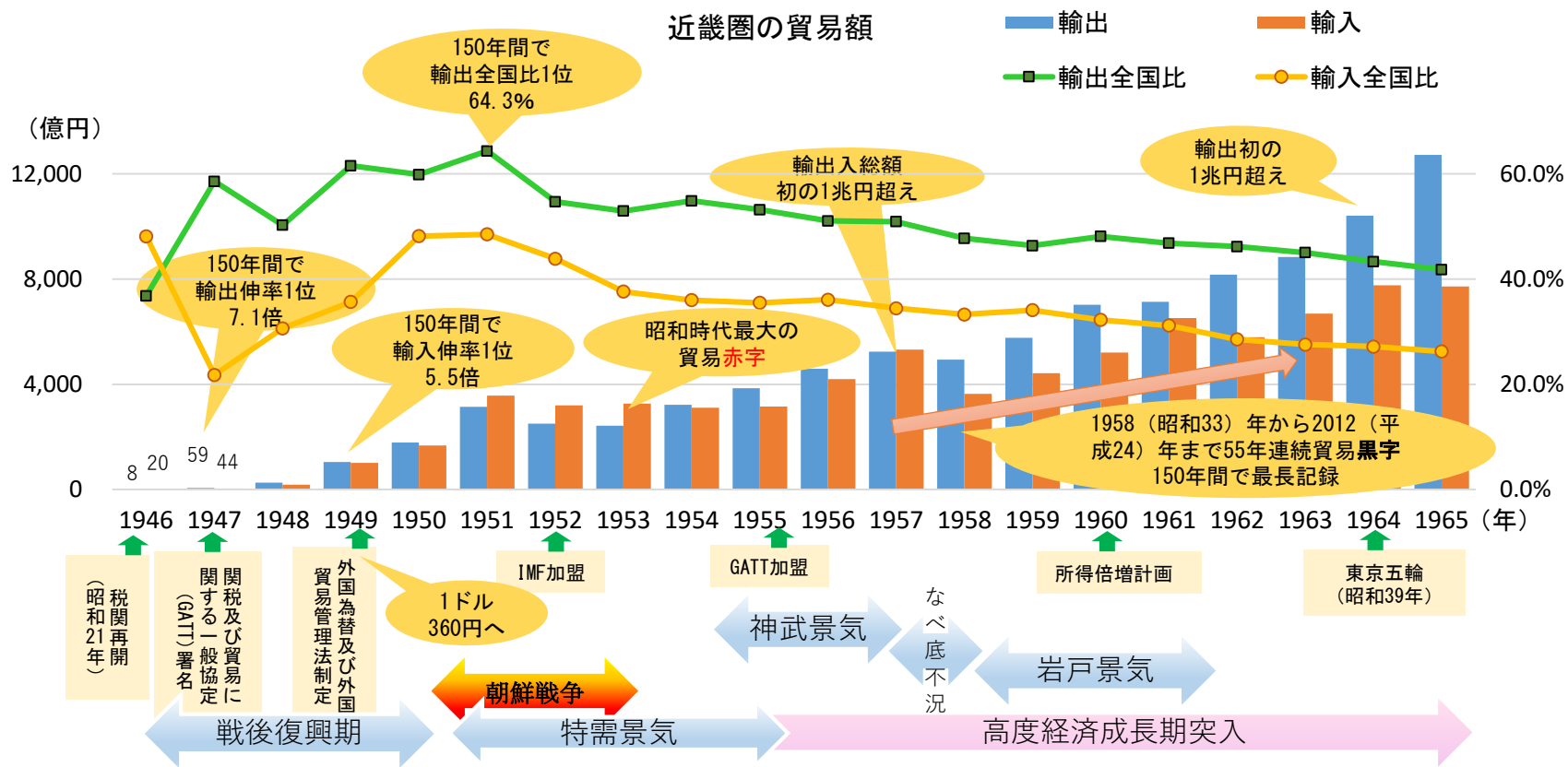
大阪港発展

昭和初期から第二次世界大戦中の神戸港の貿易は、昭和初年は輸出では繊維製品をはじめとして雑貨品、輸入では原料品など主要品目が軒並み減少傾向となりました。しかし、1931（昭和6）年のインフレーション政策によって翌年から増勢に転じ、やがて戦前における神戸港の黄金時代を迎えることとなりました。輸出は綿織物の増加、輸入は綿花、生ゴム、羊毛などが増加しました。

このころの近畿圏における動向として注目したい点は大阪港の発展です。昭和初期は経済恐慌の影響で全国の貿易不振に同調しましたが、日中戦争以降も、関東州、満州、中国向けの工業品輸出が多く、他の港湾に見られない異例の賑わいとなりました。大阪港は神戸港が天然の良港として長い伝統と充実した港湾施設を持っていたために、久しくその背後に隠れていましたが、昭和前半期には港湾施設の整備拡張が大阪港貿易の発展に大きく寄与しました。

戦禍により資料が乏しくなりますが、太平洋戦争に突入したのちは、欧米諸国との貿易が完全に途絶したために、中国大陸及び南方占領地域からの輸入のみとなり、全般的に大幅な減少となっています。

6.戦後の貿易 (1946 (昭和21) ~1965 (昭和40) 年)



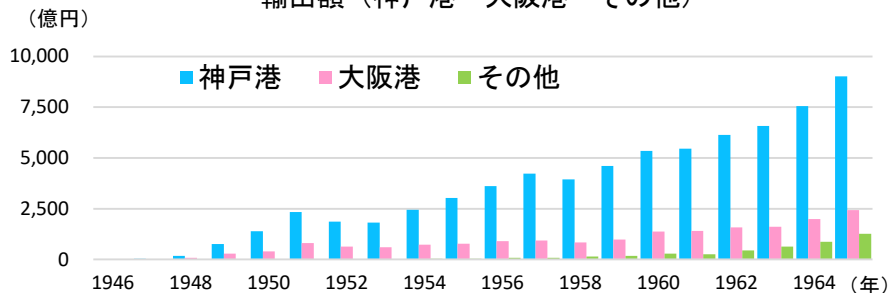
戦後の発展

戦後の貿易は、連合軍司令部 (GHQ) による統治下に始まります。1945 (昭和25) 年にGHQが輸出入全面許可制を指令し、翌1946 (昭和21) 年に税関が再開されました。1947 (昭和22) 年に一部の輸出について民間貿易が許可制とされましたが、実態は依然として管理貿易にほかなりませんでした。1949 (昭和24) 年、1ドル360円の単一為替レートが採用され、輸出は同年、輸入は1950 (昭和25) 年から全面的な民間貿易に切り替えられることが許可されることとなり、GHQによる管理貿易体制は一応解消されることとなりました。

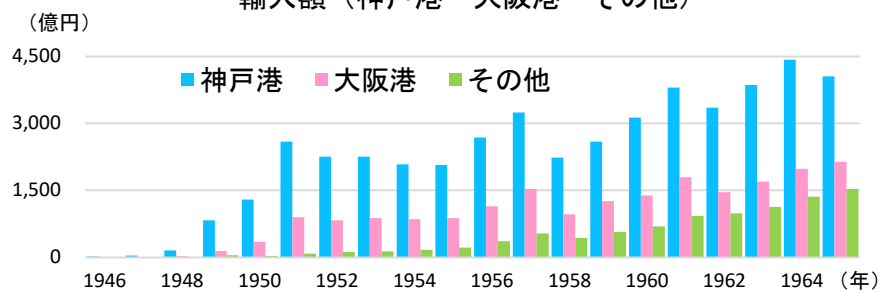
1950 (昭和25) 年の朝鮮戦争は日本経済に特需景気をもたらし、近畿圏の貿易額も輸出を中心に増加しました。1955 (昭和30) 年以降、日本経済は神武景気、なべ底不況、岩戸景気を迎え、高度経済成長期に突入、その好況不況の動向と連動するように貿易額も推移します。

1946 (昭和21) 年の輸出額は8億3,181万円、輸入額は19億5,744万円で、1965 (昭和40) 年には輸出額が1兆2,718億円、輸入額が7,719億円と急激に伸び、かつ輸出超過に転じます。この背景には、官民一体の輸出振興政策がありました。一方、全国比は緩やかに減少を続け、1965 (昭和40) 年には輸出が41.8%、輸入が26.2%まで下がりました。

輸出額（神戸港・大阪港・その他）



輸入額（神戸港・大阪港・その他）



1953（昭和28）年輸出

	神戸港	大阪港
1位	綿織物 43,906 百万円	綿織物 18,973 百万円
2位	鉄鋼の板 13,455 百万円	鉄鋼 10,564 百万円
3位	人絹織物 13,268 百万円	綿織糸 2,532 百万円
4位	ｽﾌ織物 9,320 百万円	金属製品 2,522 百万円
5位	船舶 8,643 百万円	紡織機械類(ｼﾝ含) 2,149 百万円
総額	181,494 百万円	61,172 百万円

1958（昭和33）年輸出

	神戸港	大阪港
1位	綿織物 85,036 百万円	鉄鋼 14,363 百万円
2位	ｽﾌ織物 42,630 百万円	綿織物 12,405 百万円
3位	船舶 21,685 百万円	船舶 5,752 百万円
4位	人絹織物 20,225 百万円	金属製品 5,215 百万円
5位	鉄鋼の板 14,452 百万円	鉄道車両・部分品 4,636 百万円
総額	394,741 百万円	84,337 百万円

1963（昭和38）年輸出

	神戸港	大阪港
1位	綿織物 95,830 百万円	鉄鋼 34,939 百万円
2位	合成繊維織物 30,931 百万円	綿織物 12,214 百万円
3位	ｽﾌ織物 30,408 百万円	金属製品 10,493 百万円
4位	通信・電気機器 28,073 百万円	鉄道車両・部分品 6,746 百万円
5位	船舶 25,038 百万円	紡織機械(ｼﾝ含) 6,202 百万円
総額	657,865 百万円	161,773 百万円

1953（昭和28）年輸入

	神戸港	大阪港
1位	綿花 82,884 百万円	繰綿 23,278 百万円
2位	生ゴム 10,820 百万円	米 12,870 百万円
3位	鉄鋼くず 10,735 百万円	砂糖 7,595 百万円
4位	羊毛 7,896 百万円	小麦 5,431 百万円
5位	小麦 7,402 百万円	石炭 4,907 百万円
総額	225,051 百万円	87,863 百万円

1958（昭和33）年輸入

	神戸港	大阪港
1位	綿花 61,813 百万円	繰綿 18,156 百万円
2位	生ゴム 10,785 百万円	砂糖 8,341 百万円
3位	小麦 8,890 百万円	木材 7,341 百万円
4位	金属加工機械 6,582 百万円	鉄鋼くず 5,667 百万円
5位	砂糖 6,168 百万円	米 5,282 百万円
総額	223,587 百万円	96,679 百万円

1963（昭和38）年輸入

	神戸港	大阪港
1位	綿花 62,150 百万円	鉄鋼くず 22,353 百万円
2位	生ゴム 13,864 百万円	木材 22,157 百万円
3位	砂糖 12,583 百万円	綿花 21,015 百万円
4位	小麦・ｽﾌ 12,475 百万円	砂糖 14,909 百万円
5位	産業用機械 12,430 百万円	非鉄金属鉱 6,805 百万円
総額	386,240 百万円	169,168 百万円

重工業品・機械類の登場

戦後は綿織物を中心とした繊維製品に加え、鉄鋼、金属製品などが輸出されました。輸入は国内の食糧難を反映して、小麦、米、砂糖などの食料が主要品目でしたが、国内産業の復興とともに綿花、生ゴムといった原料品が台頭してきました。昭和30年代に入ると、輸出で船舶が急増しました。輸入は鉄鋼くずなどの重化学工業品や国内の旺盛な設備投資を反映した産業用機械などの機械類が増加しました。

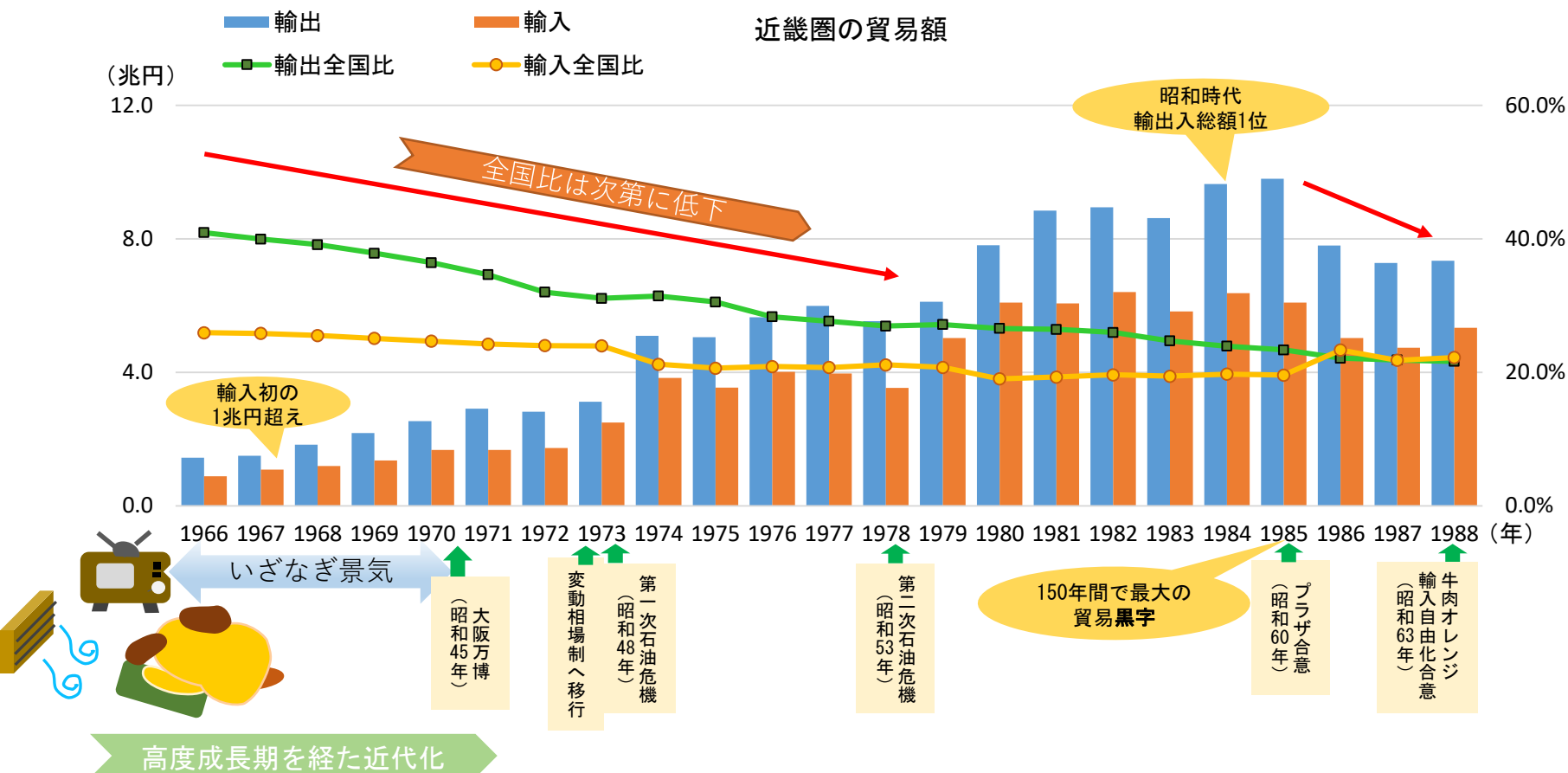
大阪港は戦災により港湾施設の50%以上が破壊されましたが、大阪経済の復興によって持ち直しました。第一次石油ショックまで日本経済の高度成長に伴って輸出入とも増加を続けました。貿易相手国は輸出入ともアメリカの首位が続きます。

また、この時代近畿圏において神戸港と大阪港以外の港が多数開港し、原油や石炭、木材などの輸入が増加しました。

1961（昭和36）年

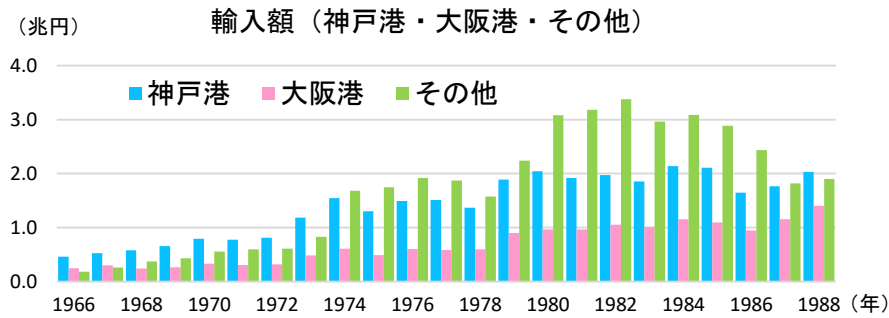
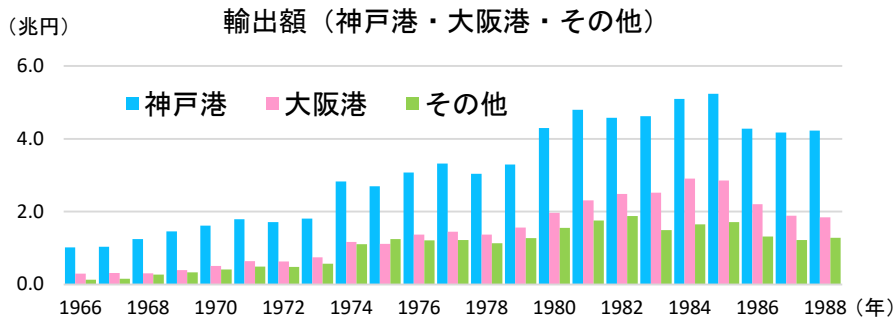
	輸出		輸入	
	神戸港	大阪港	神戸港	大阪港
1位	アメリカ 108,083 百万円	アメリカ 21,200 百万円	アメリカ 151,660 百万円	アメリカ 75,826 百万円
2位	台湾 22,933 百万円	インドネシア 20,712 百万円	メキシコ 18,233 百万円	オーストラリア 13,796 百万円
3位	ナイジェリア 22,377 百万円	琉球列島 10,122 百万円	西ドイツ 18,081 百万円	フィリピン 11,930 百万円
4位	オーストラリア 19,499 百万円	タイ 9,791 百万円	オーストラリア 16,329 百万円	カナダ 10,722 百万円
5位	シンガポール 19,301 百万円	香港 9,474 百万円	カナダ 15,802 百万円	西ドイツ 5,587 百万円

7.昭和後期の貿易 (1966 (昭和41) ~1988 (昭和63) 年)



1966 (昭和41) 年ころの我が国の経済はいざなぎ景気の最中にあり、戦後20年間にわたる目覚ましい経済発展によって著しくその規模を拡大し、体質を改善し、その国際的地位も高まっていました。大阪は高度に発達した近代商工都市であり、我が国産業、商業、貿易の中心地として西日本の管理中枢機能を形成する重要な地位を占め、戦前戦後を通じて東京に次いで主要な一端を担ってきました。

1973 (昭和48) 年に円の変動相場制へ移行があり、輸出入とも当時の史上最高を記録し、朝鮮戦争 (1950-1953年) 時以来の高い伸びを示しました。同年には第一次石油ショックがあり、全国の貿易額においては輸入超過を記録しますが、近畿圏では輸出超過となっています。以降の貿易額の増加要因は、輸出は円切り上げによる増加及び海外需要の堅調に負うところが大きく、輸入は国際的なインフレの影響が寄与しているといわれています。1978 (昭和53) 年に第二次石油ショックが起こり、翌1979 (昭和54) 年と1980 (昭和55) 年は、輸入が原油等資源コストの高騰や円安などにより、2年連続大幅に増加しました。1985 (昭和60) 年のプラザ合意により、ドル高の修正による急速な円高が進行し、貿易額が減少しています。



1968 (昭和43) 年輸出

	神戸港	大阪港
1位	合成繊維織物 118,995 百万円	鉄鋼 53,940 百万円
2位	衣類 85,685 百万円	船舶 30,457 百万円
3位	綿織物 72,218 百万円	織物 28,115 百万円
4位	金属製品 52,430 百万円	金属製品 23,654 百万円
5位	合成繊維糸 47,718 百万円	織物用糸 18,251 百万円
総額	1,248,533 百万円	307,292 百万円

1972 (昭和47) 年輸出

	神戸港	大阪港
1位	合成繊維織物 192,687 百万円	織物 78,574 百万円
2位	金属製品 92,866 百万円	鉄鋼 70,213 百万円
3位	合成繊維糸 81,162 百万円	船舶 64,075 百万円
4位	衣類 75,416 百万円	ラジオ受信機 38,254 百万円
5位	ラジオ受信機 67,209 百万円	金属製品 35,484 百万円
総額	1,713,296 百万円	625,256 百万円

1978 (昭和53) 年輸出

	神戸港	大阪港
1位	合成繊維織物 300,578 百万円	鉄鋼 140,359 百万円
2位	金属製品 187,584 百万円	ラジオ受信機 112,125 百万円
3位	鉄鋼 116,619 百万円	金属製品 90,484 百万円
4位	船舶類 107,201 百万円	織物 64,778 百万円
5位	人造プラスチック 99,410 百万円	家庭用電気機器 56,360 百万円
総額	3,037,721 百万円	1,367,834 百万円

1968 (昭和43) 年輸入

	神戸港	大阪港
1位	綿花 62,051 百万円	非鉄金属 33,973 百万円
2位	非鉄金属 35,816 百万円	木材 28,876 百万円
3位	大豆 18,248 百万円	綿花 27,573 百万円
4位	鉄鉱石 14,611 百万円	鉄鋼くず 12,939 百万円
5位	小麦・麥ワリ 14,479 百万円	非鉄金属鉱 12,674 百万円
総額	579,505 百万円	243,892 百万円

1972 (昭和47) 年輸入

	神戸港	大阪港
1位	綿花 65,204 百万円	木材 40,635 百万円
2位	生糸 40,512 百万円	綿花 28,963 百万円
3位	大豆 38,377 百万円	非鉄金属 22,913 百万円
4位	非鉄金属 27,889 百万円	肉類・同調製品 22,325 百万円
5位	魚介類・同調製品 22,275 百万円	原皮 15,567 百万円
総額	809,496 百万円	315,539 百万円

1978 (昭和53) 年輸入

	神戸港	大阪港
1位	綿花 73,144 百万円	木材 68,772 百万円
2位	衣類 64,068 百万円	肉類・同調製品 56,494 百万円
3位	大豆 58,666 百万円	衣類 40,339 百万円
4位	魚介類・同調製品 50,546 百万円	綿花 33,111 百万円
5位	織物用繊維糸 47,762 百万円	非鉄金属 27,927 百万円
総額	1,366,074 百万円	596,178 百万円

1971 (昭和46) 年

	輸出		輸入	
	神戸港	大阪港	神戸港	大阪港
1位	アメリカ 497,998 百万円	アメリカ 115,857 百万円	アメリカ 217,607 百万円	アメリカ 64,453 百万円
2位	香港 124,472 百万円	韓国 50,209 百万円	ドイツ 61,108 百万円	オーストラリア 29,552 百万円
3位	台湾 82,265 百万円	オーストラリア 48,048 百万円	オーストラリア 36,389 百万円	ザンビア共和国 15,114 百万円
4位	シンガポール 65,654 百万円	台湾 39,964 百万円	中国 35,148 百万円	カナダ 14,474 百万円
5位	カナダ 64,225 百万円	インドネシア 38,914 百万円	カナダ 30,741 百万円	ドイツ 12,032 百万円

ハイテク品目登場

神戸港は1954 (昭和29) 年以降、毎年輸出超過を続ける「輸出港」となりました。近代的埠頭の建設がすすめられた時期もあり、1967 (昭和42) 年には摩耶埠頭に北米航路優先埠頭としてコンテナバースが整備され、同年、日本で初めてコンテナ専用船が入港し、日本の海上コンテナ輸送の幕開けを告げ、世界有数のコンテナ取扱港に飛躍しました。

大阪港の貿易は輸出の増加が目覚ましく、1951 (昭和26) 年以降恒常的な輸入超過の港となっていました。1964 (昭和39) 年以降1995 (平成7) 年まで輸出超過になりました。また、1969 (昭和44) 年、我が国最初のコンテナ専用埠頭である大阪南港に、コンテナ専用船が入港しました。

昭和50年代以降、輸出はハイテク関連製品が台頭しました。我が国の技術力の高いこれらの品目は、アメリカ、EC (欧州共同体)、アジアNIIES (韓国・台湾・香港・シンガポール) 向けなどに輸出が増えました。

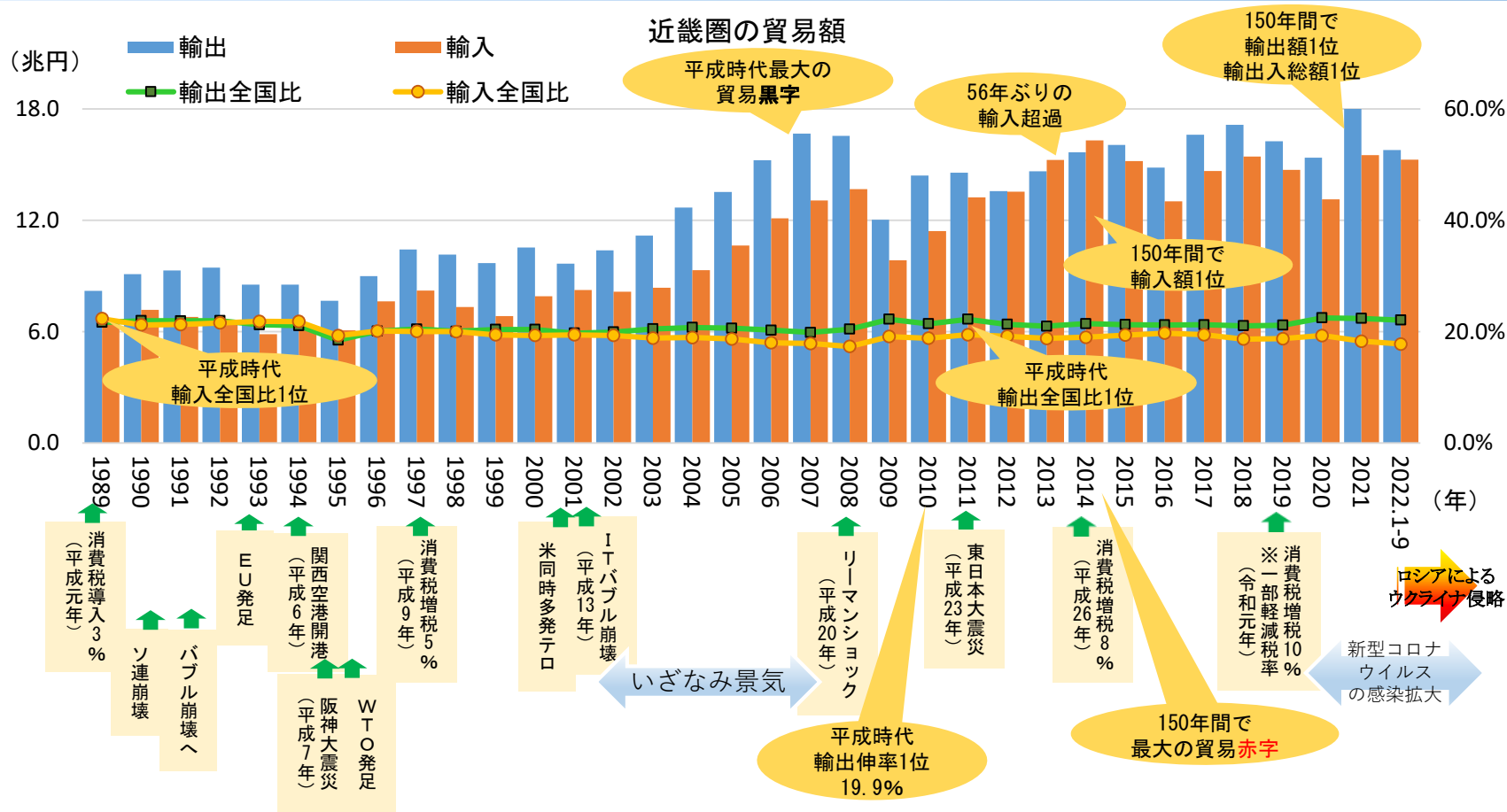
ハイテク品目の台頭



目次へ戻る

NEXT

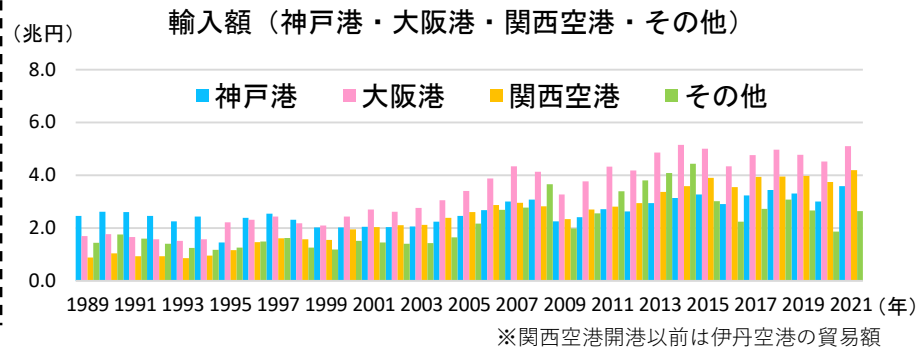
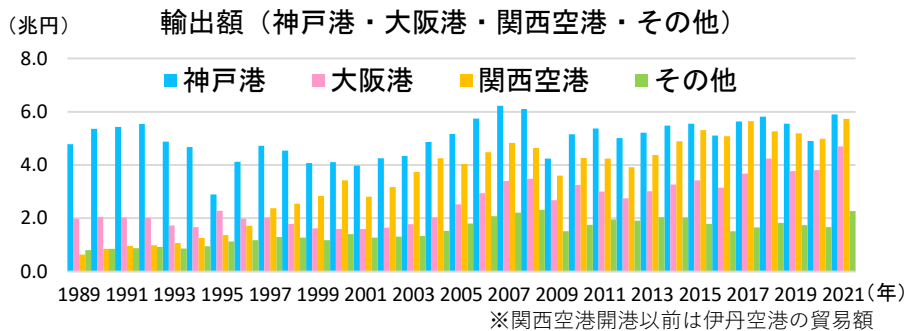
8.平成令和の貿易 (1989 (平成元) ~2022 (令和4) 年)



過去最高の貿易額へ

1994 (平成6) 年に、航空機の発着回数に制限のあった伊丹空港に代わり、我が国初の24時間運用可能な国際空港として関西空港が開港しました。1995 (平成7) 年には阪神大震災が発生し、近畿圏に多大な影響を与え貿易額及び全国比は減少しました。2008 (平成20) 年にリーマンショックが起こり、全国的に自動車や電子部品などの輸出を筆頭に貿易額全体が激減しました。そして、2011 (平成23) 年に東日本大震災が発生し、原油や石炭などの鉱物性燃料の輸入が増加、近畿圏においては長らく輸出超過が継続していましたが、2013 (平成25) 年及び2014 (平成26) 年は輸入超過に転じました。

近畿圏の貿易額としては、1989 (平成元) 年は輸出が8兆1,944億円、輸入が6兆4,654億円で、2021 (令和3) 年は輸出が18兆6,002億円、輸入が15兆5,080億円と輸出は2021年、輸入は2014年にこれまでの過去最高額を更新しました。



1991 (平成3) 年近畿圏 (百万円)

	輸出	輸入
1位	繊維用糸及び繊維製品 745,616	衣類及び同附属品 632,542
2位	映像機器 579,240	原油及び粗油 532,611
3位	鉄鋼 524,149	繊維用糸及び繊維製品 378,515
4位	事務用機器 494,810	鉄鋼 302,008
5位	半導体等電子部品 386,176	魚介類及び同調製品 289,702
総額	9,293,452	6,788,782

2001 (平成13) 年近畿圏 (百万円)

	輸出	輸入
1位	半導体等電子部品 909,427	衣類及び同附属品 988,465
2位	繊維用糸及び繊維製品 545,535	原油及び粗油 531,100
3位	事務用機器 485,436	天然ガス及び製造ガス 379,774
4位	鉄鋼 399,491	肉類及び同調製品 364,391
5位	原動機 349,762	事務用機器 289,004
総額	9,666,349	8,237,760

2011 (平成23) 年近畿圏 (百万円)

	輸出	輸入
1位	半導体等電子部品 1,637,048	原油及び粗油 1,271,570
2位	鉄鋼 852,620	衣類及び同附属品 1,011,594
3位	プラスチック 693,156	天然ガス及び製造ガス 940,671
4位	科学光学機器 630,855	医薬品 633,520
5位	建設用・鉱山用機械 496,542	音響・映像機器(含部品) 427,997
総額	14,564,941	13,239,153

2021 (令和3) 年近畿圏 (百万円)

	輸出	輸入
1位	半導体等電子部品 2,434,248	医薬品 1,196,410
2位	プラスチック 853,813	衣類及び同附属品 990,235
3位	鉄鋼 710,077	天然ガス及び製造ガス 850,099
4位	電気回路等の機器 687,734	通信機 645,904
5位	建設用・鉱山用機械 652,100	原油及び粗油 517,230
総額	18,600,211	15,507,978

現在輸出1位の品目である
半導体等電子部品が登場!
1988年以降毎年ランクイン!
1999年から23年連続1位!

再び中国が首位に・・・!

近畿圏の貿易は昭和時代の高度経済成長期にテレビや冷蔵庫など音響・映像機器、家電製品の輸出に支えられ輸出額を伸ばしたことを背景に黒字化が進みました。今もこの傾向が続いており、近畿圏の輸出主要品目である半導体等電子部品は全国比5割程を占めています(令和3年49.7%)。液晶パネルなどが含まれる科学光学機器や通信機など新しい品目の登場とともに、長く近畿圏を支えてきた繊維製品は2005年を最後に輸出入の上位品目から消滅しました。しかし、2021(令和3)年近畿圏における「繊維用糸及び繊維製品」の全国に占める構成比は57.8%と今も高くなっています。

近畿圏における主要貿易相国1位は、輸出は2003(平成15)年、輸入は1994(平成6)年にアメリカから中国に変わりました。

近畿圏の主要輸入品目「衣類及び同附属品」は、中国産の構成比が大きかったものですが、最近ではASEAN諸国からの輸入も増加しています。

1991 (平成3) 年近畿圏 (百万円)

	輸出	輸入
1位	アメリカ 1,819,880	アメリカ 1,209,669
2位	韓国 780,331	中国 798,613
3位	台湾 753,277	韓国 496,550
4位	香港 640,743	インドネシア 384,542
5位	ドイツ 552,387	オーストラリア 374,296

2011 (平成23) 年近畿圏 (百万円)

	輸出	輸入
1位	中国 3,541,675	中国 4,314,969
2位	アメリカ 1,568,396	アメリカ 913,284
3位	台湾 1,356,014	オーストラリア 688,042
4位	韓国 1,205,130	韓国 636,471
5位	香港 997,527	インドネシア 545,297

2021 (令和3) 年近畿圏 (百万円)

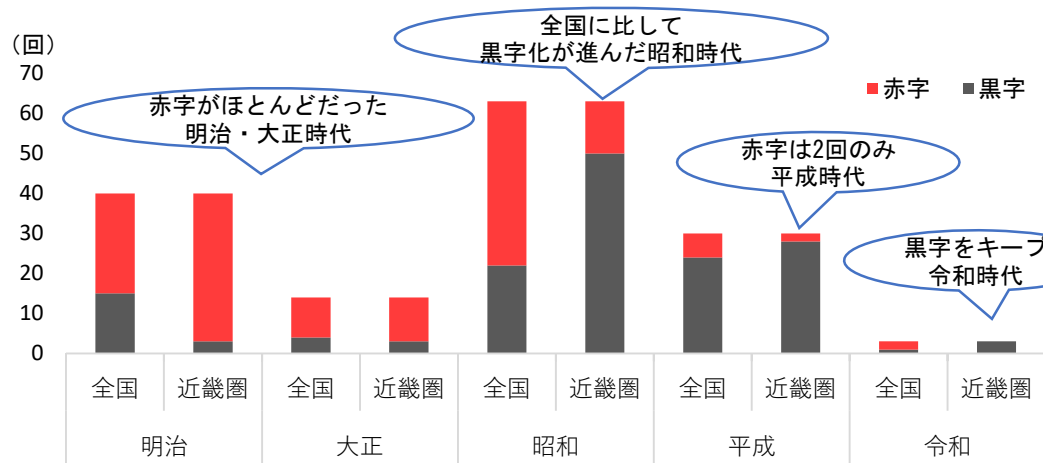
	輸出	輸入
1位	中国 4,871,414	中国 5,010,920
2位	アメリカ 2,548,200	アメリカ 1,361,455
3位	台湾 1,997,770	台湾 824,876
4位	韓国 1,227,667	オーストラリア 774,360
5位	香港 1,089,427	韓国 683,326

9.おわりに

さて、150年間の貿易について振り返ってきましたがいかがでしたでしょうか。様々な出来事とともに貿易額は増減し、時代ごとに歴史を反映していることが少し読み取れました。

明治時代、神戸港に圧倒的に隠れていた大阪港が、歴史的な産業・工業の発展や戦禍による特需、港湾施設の改修、対アジア貿易の拡大などを通じ全国的にも大規模な港へ転身していったことがお分かりいただけたでしょうか。

【各時代における「貿易黒字の年」、「貿易赤字の年」の回数】



貿易黒字・赤字について全国と近畿圏を比べてみると、近畿圏は昭和時代以降全国に比べ黒字の年が多くありました。

平成以降、貿易赤字になったのは2013（平成25）年、2014（平成26）年の2回のみです。

昨今においては、世界的な半導体不足や、新型コロナウイルスの感染拡大、ロシア・ウクライナ情勢、エネルギー価格の高騰、為替相場の急速な円安進行など目まぐるしく変化する社会情勢の中で貿易統計はどのように推移していくのでしょうか。

2021（令和3）年に近畿圏の輸出入総額は34兆1,082億円で過去最高額を更新し、2022（令和4）年は1-9月の時点で31兆579億円、対前年同期比プラス25.6%となっています。

この歴史的な瞬間を貿易統計の数字とともに眺めてみてはいかがでしょうか。

